海鷗風土記

坤

ル 4
1249
2

外國叢書

[illegible][illegible]風土記卷下

14

海嶋風土記巻下

外國叢書

二十八

編脩地誌備用典籍

伊豆海島風土記巻之下

伊豆海島産物の部

アヒタ
又アイタ島名なり 時珍本草塩麸子附録曰按
粟東有女國産鹹草云々 倭本草鹹草アヒタ
ト訓ス 八丈民多植朝夕粮充云々 後漢書東
夷傳海中有女國とあるも此島なるべしと有り
或書ニ云人疱を患へるハ八丈中就中是を植
て治れハ其二物なりと云ふ
三年アヒタ 即ち鹹草の三年物経るものをいふ 此第三

夏秋へて始て花咲き実結ふこともあて候
之候し跡し大きなるハ茎四角葉様も如き也ハ
すなき也へ厚葉味甘苦香気有り実段種く
其形小麦粒様ニして小花アミ多しとゆふ

蒿コウ　柑子(コウジ)　釜山柑子の類也

土ホウツキ　人むかしより両地の物也同し

鬼アザミ　大薊小薊とも言ふ大きく葉広く丈一丈
丹なる四季を通して冬も花有り

三七　両地乃物より大小ともニ今深山ニ有て昨今
両地の物有り葉形大まかなり

セリ
麹(コウジ)　一名芹ワタリ　又水ニ産
深山巌石大木ニ寄りて生し大なるハ七尺

なかりき

カリヤス　両地の薄草より大なり秋段深まふ色好
しめて畑ニ作りて七月ニ刈る

サク　百合なり沿朝百合と云物也

牛エビス　蔓菓なり

小チフナ　蒲公(タンポポ)の類

大チフナ　さんすいの英や

セナトカツラ　忍冬の類

シマ葉　鳳尾草(ウモヒロ)なり

大ヒゲ草　蕨(ラトロ)なり

ミミナ菊　両地ニ同し

ヤマスケ　葉大なり
ツタ　千歳(セニサイ)かつら也
アマチヤ
ヘヒアヒ　蛇苺(ヘヒイチゴ)なり
ノヒル　根大なり
スキナ　古葉実中より出て正月末ニ結ふ
ホツイ　炷心中の[illegible]て水気ある地ニ生す[illegible]
乃　蘭中ははし[illegible]なり
ハマユウ
イツマメ　渡辺ニ生まて[illegible]蚕豆ニ似たり　毒なり
食しよろし

シリ葉(ハ)格(ミ)　涯なり
蘭(ラン)　蕙(ケイ)あり　葉長し　香気厚し
大島豆　昔薩摩国大島の人漂流して来りし
附　此種を傳ふ故ニ大島豆とよふ　蚕豆(ソラマメ)ニ似たり　小之
本草綱目ニ此説を出す　の條ニ有
イチヒ
ヲニシダ
ワラヒ　早蕨を正月末より出し花ふ和ふなり
ナテシコ　五月より十月まで　咲き事多し
咲キミヨ　薄(スヽキ)あり　四季共ニ枝ごと咲く　八九尺一本ニ
乃ふ　茨(ウバラ)とよふ　薄ニ似たり
水仙　咲よう　晩ニ結ふ　八月より花咲き未也

ツハイ茸　椎の古木ニ附く四季ともニ所々ニ生ず味
ひとかたり古人賞玩しく成ル椎茸ニ似たり
シイ茸　深山の朽椎ニ春秋二度生ず又花中ニ
生ずる所有り味最よし
ハツ茸　海邊の小松原ニ暮秋二度生ず形あたり
味ハ国地の物ニ同し
ホクラケ　諸木ニ生れとも多ハみな山木ニ多く生ず
シノフ　国地の物ニ同し葉最細く成り
馬クサ　藤ニ寄り葉短く花るいくるし
三ツ葉芹　皆地生なり香気強し
葉ミつミニ異なり大なるも出す一二寸余

四五尺之　近来薩摩より出て世ニあまねくことなの
是あるや多し
バカ子　菫（スミレ）也
ヲホ千ヰ　乳地（チチ）少なり
チヰキ　国地の物より大なし
ヲトキリ草　国地ニ同し
シチもバ　葉細し
ツイ草　国地の物よりおおきなる物也深山ニ有りよし
草ミノブ　葉形常の物ニかはりて葉細し
ノス　膨脹なり
マヽおウキ　茎甲中ニ似て葉ニ強くさく節もなし

ヨシロイ
土サセウ
シヤトリアヒ
マメツタ
イチゴ
ゼニマイ
アツサイシバ
イヌキウツキ
マタヽ

山野に生じる花黄色赤白黄様々ある
崖椒に類し違ひあり
藤乃類也
木に根石のようまとひて樹よりゐるなし
苺類あり
陶地の物より大也
紫陽花なり大なるを一丈に越ゆる
葉に対する去年より咲き同様に見えぬものや
樟なる色し 陶地の玉樟とふに似て 木
大之 柞も樟に等しく枝とおなじく形を遠ざくる
保川流を薬として衣服染に危色にある八丈

クサタヽ

椎

黄緒の如き色とらふそれを以て染る 昔者は花咲
実を六月に熟す 此実熟する時は青黄に変る色
出入根とまた木材に樟似楠葉同細白花造船と伺り
女貞 葉似 葉花咲実を九月熟して此実を絞
表にし清き油滴り忽白蝋となる又食にも成ものて
青黄に変て根として常には色地へ出す 敷に交易して
又此木の皮を薬として家人の衣類細物を染る
に赤色を為す 花薬あり 木之
三月花咲実を九月に熟す是を採て根とし
又薬に交易して皮を薬としてく東鉄漿と染る黒色
物にす 八丈黄緒の黒色は是なり 本之 極果に用

ひこ絲保以す久し最上の用木なり

トウザ桑

荊桑牝此葉ハ蚕ニよし 葉形皆深し 蚕に
飼ふ時は多人もさ等と云物なれ共悪敷
く蚕始患ふすまのひす 山桑なを魯桑を植て蚕を飼
ふて 其葉廣く厚し 風味良く諸國に弘まれ共桑
を女六七間ほどく 木生理最ゆるり 卓机ニよる
ハ唐桑のよろし

梅

大木何れとも 稀なり 花を年し 十月より咲花
形ち大小あり 香氣強し 実取諸ふ中 何も同し
庭風に叢て平園をわきます

櫻

山中に多く大木何れ 花を一重ニて 吉野の櫻に

桃

華し二月下旬より花咲 毎年何れ実ありて其之倍す
庭梅より桃のとし 多人植付て 渋き味
ひすく酸ある之
農園の畑等ニ多し 其中に花咲き実ハ倍
小さく通しより 桃ニ似てあり 首蓋ニ植し 味
ひす至風なり

松

大木なり 冬ニ漁舟を造る 木性実し 強き
とも 白蝋より重好て 食ふ方ニ 家材ニ用ひ又
木理悪形も 漁舟ニ割て 有の方ニよろし
有りてころもくへなり

檜

此木船具の用ニ然し 方ニ人而て

楫

楫木といふも　汐風或は荒磯に木痩たる之
如木ならす　楫と同し木性之続き枝に節も
浅くそれより やはらけて　船の刻目を塞く

アスナラウ　イヌマキ　羅漢松なり　此木八丈嶋の御陣屋
にあり　国地のアスナラウといふ木は此る枝に似て
枝に近し　此他楫の類も真木皮の類多くて
出人是を求て打割て常に船の刻目を塞くし

柳

国地の柳にある事それにも　十月ゟ芽をまた
大木なれとも　折あしく家材に用ゆるは能はす
枝を採て編むに用ゆるのみ

アサカラ　如木真直なる　立ちて　葉唐のとし木性弱し

大木なれとも用ゆるにたらす
白　櫨なれとも　曲節多く物の柄棒等にも
なるへき木なし

櫨

ヒイラキ　大木なり　花も実もなく度々実りて　三月頃花
実木性とも国地の柊に実なるを　それより葉
落くとなし

子ムタ　国地乃物に同し

ミカン　花前後より咲　香気強く　実の大さ少なく
国地の九年母に似て味甚劣なり

クネンボ　家にも多し　大木に実なりて未た青きを採て
酸とし　難きは葉に包み貯て二月迄に保つ

カフツ

味甚酸しく他国に稀也
ダイヽ也家毎に植て実核ありて酢とす
し飲食の用とす青き実を絞り黄熟し縮れ
ハ味ひとけく摘へずして実太なりて熟するハ皮味
く國地の九年母の香しき事なきにさし

柑子

國地の柑子に同し是又実核多く皮とれ
甚た薄を製し漬し試るに唐の陳皮
に劣りさるよりも覚ゆる

ボウカウジ

ハ土の方言に大をボウと云大柑子之類にて
大なり実ハ橙柑より大にて肌滑らかに味酸く
柑子に似たりジャガタラ蜜柑の類なる

ブシユカン

香橼也此木少し形を梨に似て少し長り
一尺ほどなるあり味酸く甘く香あり

キンカン

大なるあり花葉実とも柑子に等し味酸く
香気ありて國地のきんかんとハ大に異之
島名不詳民家の園に植る花実ともに柑子に似
て実ハ大にし肌滑らかに葉も常の通りに附実熟し
て味能きて酸し

榠

花実とも汐風に痛みて熟するもの稀し形ち
大和榠の小さきものあり

梨

花も仲秋まで後晩実之実ハ汐風に痛て
熟し難し味ひなしす

イソリミ

胡頽子也　叢木にて実ハ　薬草にもなる
葉厚く潮風に潤ひ　故にイソリミといふハ海岸
田畑の囲ニ植て風を防く　黄ニ熟し実をつけて
根ふ多く食へハ　上気しく赤面もして

ナイミヤウクミ

前の如く葉し　三月に赤き実熟す　木ハ
かつらの如くにて　実は細かくて紫黒色ニ熟す
熟する時つけて　猶を前の園地なれハ　苗代クミ
といふ名をも負ひきし　ナイミヤウといふハ

スヽクミ

三月淡紫の細き花を開き　実あきて実
たわわに熟して後　煤色にて葉にも　如何なる
ら実のグミより味好し　唐の葉草なる

楊梅（ヤマモモ）

山中に生し　樹は大木なり　皮を薬とす　又
染草と成る　実は生にて食す　多く家にも
是なれ酢て　如醋を作り　又塩にて漬て
貯へ　根とす其置て用ゆ

サクロ

園地の苗と同し　実大なるも有り
多く有り

椶櫚（シユロ）

園地の如く同し　其是を毛縄にも
多く有し　葉を一尺の　紅にて八月より咲く
種へて多く　其実の皮をとりて　葉を束ねて縄に

ハイノ木　又ハミノ木

又園地ニ生し　穀ニ宜し
樺山　野及び　畑にも　植て多く　仲春花あり

初めは実生ならすや挿木とも 漆実の
ひらく黒色をなす 葉形等の如く肥て由を潜
し又枝葉を集め 田畑へ置は 土を肥す 文字
に葬とあし 民家の要木也
ヨウチノ木
深山にあり 大木と成るもの 肌楠に似て 梅にも
似たる所有り 木理細にして 用る所多し ありときとの
イナクリ
國地の物なり 用るもの也 実大なり
ツゲ
黄楊也 湯気多く有り 木性好 伐て細工
多出し 高き價ある 彩を字多し 多への 櫛と
成となる 八丈嶋 薩摩ともに 出る
イスツゲ
柞木 葉細く 木も堅実 木性堅くして 高く

柳に並へ類し
ミツクサ 又ミツキ
八丈大木有り 初夏白花を開き 秋夏の
ころ紀実結ぶ 多くへ家材にも用ひ 又諸細工にも
着けのる 箸として上京第一なり
イツノ木
樫有り 山に多し 薪に用ゆるのみ
ナヽテミ
南縄たまあるは 一丈ニ越へ 四季実もちて
ミタキ
本性強く多く 斧鉋の柄として 又枝を刈
て牙楊枝とせれは 歯の痛み止むとて 大和州に
作り出す実も 結ばは 蠟となる 信濃越後等に多し
イホタ蠟を出せり
アカミノ木
山中に多く 仲夏花咲 秋の実熟す 木は

なし圃地乃モツコリなり

ウタキ　花アヂサイに似て葉厚く木堅く別種也

カスマハ又樒乃名也　仲春実後に木形葉の色実形とも

香花果乃小きもの也

クロフチ　島人植て田植する時に植て田乃しるしと云へ

高さ二丈ばかりの木也俗に玉椿又ヒサキといふ類之

サカキ　榊乃新字　別種にて国にありクサキといふ

クサキハ草榊の略音歟　此木の歴あり榊の色を出

又島人葉の香しきは此等草榊採り製す

葉の代りに用ゆる之

トヘラ島名未詳　花実ともに白し何に島人夜床に擦りて臥す

是は古き葉もの也

ハシキ　楊櫨の類也島人箸に削り用ゆ故に此名あり

シラタケ　近年山中より出て里に植る由三寸ばかり

年を経て高さ一丈葉広くある者あり木の類

乃類歟

トウコシ　海岸に流れ寄る物を拾ひ民家に多し

丈一丈に越して四五寸葉あるなり

クシラクサ　鯨草なり

ウシセリ　蒐若

スイカツラ　忍冬

ヒアウキ　射干

ミツヒキ　海根
アヒ　覆盆子
ヤマタバコ　鶴虱
スユハ　羊蹄 大黄
石菖
カラヨモキ　菊
トコロ　野老
ヤマゴボウ　高陸
センブリ
ヨモキ　艾（モクサ）
カツラノ根　葛根

ツタメブチ　土伏苓
ホウノツラ　蔓荊子
キヽヤウ
リウノヒゲ　麦門冬
ニンニク　蒜
ヘンコ　天南星 花低ク本ニツク
イタトリ　虎杖
イヘンコ　天南星ニ似テ花中ノ長僊セシ白南星ナルヘシ
タカサラン　天南星ニ似テ花末ニツク
ツリカ子草　淫羊霍
ヨメナ　鶏腸菜

テイツバ　石韋
ホウキンバ　豪吉
ヲバク　車前
ナモミ　稀薟
チカヤ　茅
フキ　款冬
ナヅナ　薺
ヒヤウ　莧
ヤクナ　天名精
スヘリヒユ　馬歯莧
ツハアツキ　綿黄耆

ウミヨモキ　益母艸
カナツル　海金砂
　　　　　及已
コウミユ　香薷
ヒヨトリジヨウゴ　白英
リウタン　竜膽
サミン　沙参
フヂハカマ　蘭
カクマリ　貫衆
ニラクサ　香附子
ミリ

山ニンジン　蛇床子
ハゲイトウ　雁来紅
ケイトウ　雞頭
サハヘンコ　牛蒡
アサガホ　蕣
カチスイノシタ　栝蔞ナリ　御蔵島ニ多シ
カハラサイ　翻白草
デブ　何首烏
トウタイクサ　沢漆
ホウイ　燈草
ウヘツラ　木通

サイノツノ　斑枝花
ツルハコヘ　繁縷
四季三宅島ニアリ
防風新島ニ多シ
天門冬同上
フウホト　茯苓
桑白皮　桑耳
クチナシ　山梔子
トウノ木　常山
アケビ　冬青
ヒヤハトマメ　接骨木

ハヽノ木

クモ草　紫荊　シノブノ類

魚

テイ　鯛乃形赤色形尖りて海底七八十
尋より百尋余の深さに住遥沖にて釣味
ひ鯛と同し首尾形小さく尾は岐あり

カツホ　鰹

カテウ　磯にて釣沖多く肉形多くて大味之
多様く鰹は馬蹄あり丈二尺四五寸

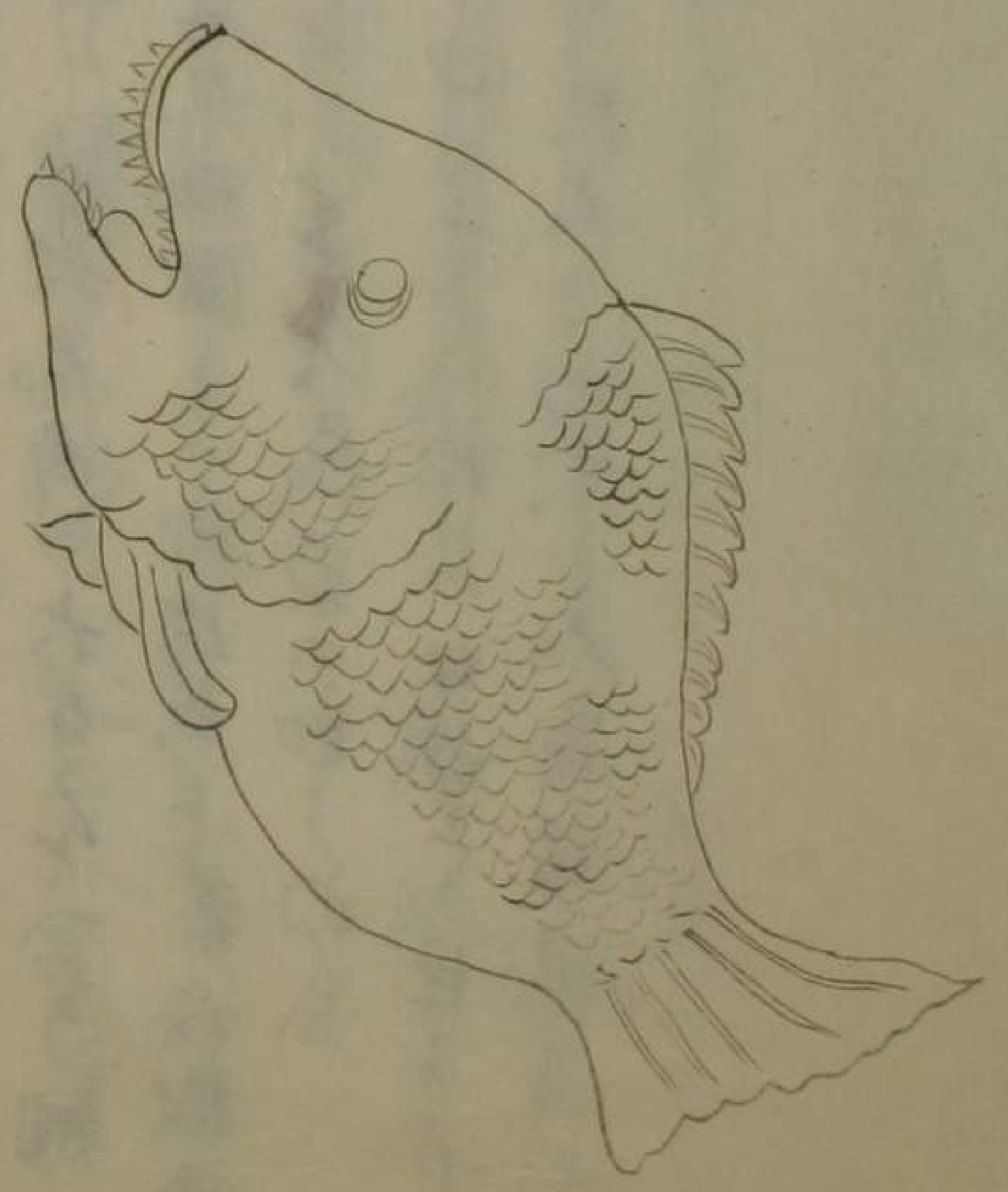
サウラ　十月より正月まて、かこハンとんに藻を餌と

一条之四十尋位ハて磯にて釣形黒鯛ニ
似て沖深し鼻先あり大さもへうす鯛小
さき尾ハ黒叉血淵と云ふ此魚多く葉大根雑
穀を入て家ふ其外民家の助となる

モロコ　遥乃沖にて釣る口ひろく巨にて
鰭歯あり頭大きく丈三尺許味細にて大
味ありて強し

鋸歯有り大きく丈三尺斗体鯛より大味にて強し

モロコの図



マスノウヲ 夏より秋まで沖にて釣る丈二尺余目形ふかり 沖にあし 腐りやすく 国地の魚とは異なり

シヤケ 季夏より秋にかけて沖にて釣る其性強く釣縄をとくひきる事常也 大さ五六尺国地の鮭に似て少しく違ある沖の魚なり 淡く塩乾にて食ふ

カシカシ 季春より夏にかけて ハンパと云藻を餌となし沖にて釣る丈一尺二三寸異形也 淡く味よし 干魚となして

カロウ 甚沖にて釣る丈二尺より三尺二三寸 味モロコ

となし　柄ちいさく連綴の紋あり

ヨウノヒラ　容ち鯿に似て其大さ三尺余あり　四尺に至る
海底八九十尋なる所に二三月より十月まての間日
の出日比入日に牛の角を以て釣る　漁なる味ひ好し

ハロウ　形モロコに似て色黒し之　味ひ好し　大なる
より鉤なる沖にて釣る　漁多く味好し

クマノミ　其頭甚大く釣る色青黛のことし　其形の色之
大一尺二三寸　肉和らかにて味甚よろし

ミロチ　始めは鯵ともいふ　暑文　背に礁を持なる也
二三尺斗り　味鱸に似たり　背より骨も小骨なく　章中
着るとの根附をなし

カツホサメ　形鱸に似て長五尺はかり七尺にいたる大魚
なり　味鰹のことくなれとも　油多し　日に乾して
節へ出の物とす

ツノサメ　深海に住　生背骨に角のようなる
ことく身より鼻ちかく　長三尺余　眼皮
沖にては六七尺ある　海底深き所に在て多く捕
る

ハサメ　春より秋まて沿海にて網に掛る　長二三尺
味ひツノ鮫より劣し

ツコサノ　遠の沖にて釣る　大七八尺の大魚にて鮫
よりも亦鈍し　眼　沖にては二三斗より四斗ニ

至る肉縁切口乾して後へ民家の肺とし

ショサイ　圖地のセウサイ鱗の類也　形もふとく

ナタアナゴなり

カナタ　状蛇の如く　赤黒色にて背　鯉鮒なとの如く

尖ヨリ口中歯ム利器の如く　泳んで小魚を食ふ

アナゴの類ち

ヤコ　状ち蛇の如し　黒白の斑文有り　其性猛く

さ捕る時は人を噬し

コハナタ　鰻に類して尾の甚口海境に住む　長二尺余　状

ドゼウに似たれとも大きさ也　長サ平り　泥の中に住

専し　此魚夜中へ出て遊ぶ　其路を慕ひて捕る

サミン　磯にて釣る形ちやまに似たり　総て味ハ其他

の鱒に同し　頭尾を除て　此魚の長さ二三尺四五寸余

コミ四尺外物あり

スチウフ　状其他の鮒に似たり　長さ四寸巨く斜める

有害焼の比　河の岩間に游ふを見て食ふ

クサイ　此魚春夏の比　磯の小窟に游で　長四五寸

斗也　状黒形ちにて色赤く　両肥に其背のうへ

にも鋭き鰭有り　尾も箒の如し　磨き絵の如くにて上游

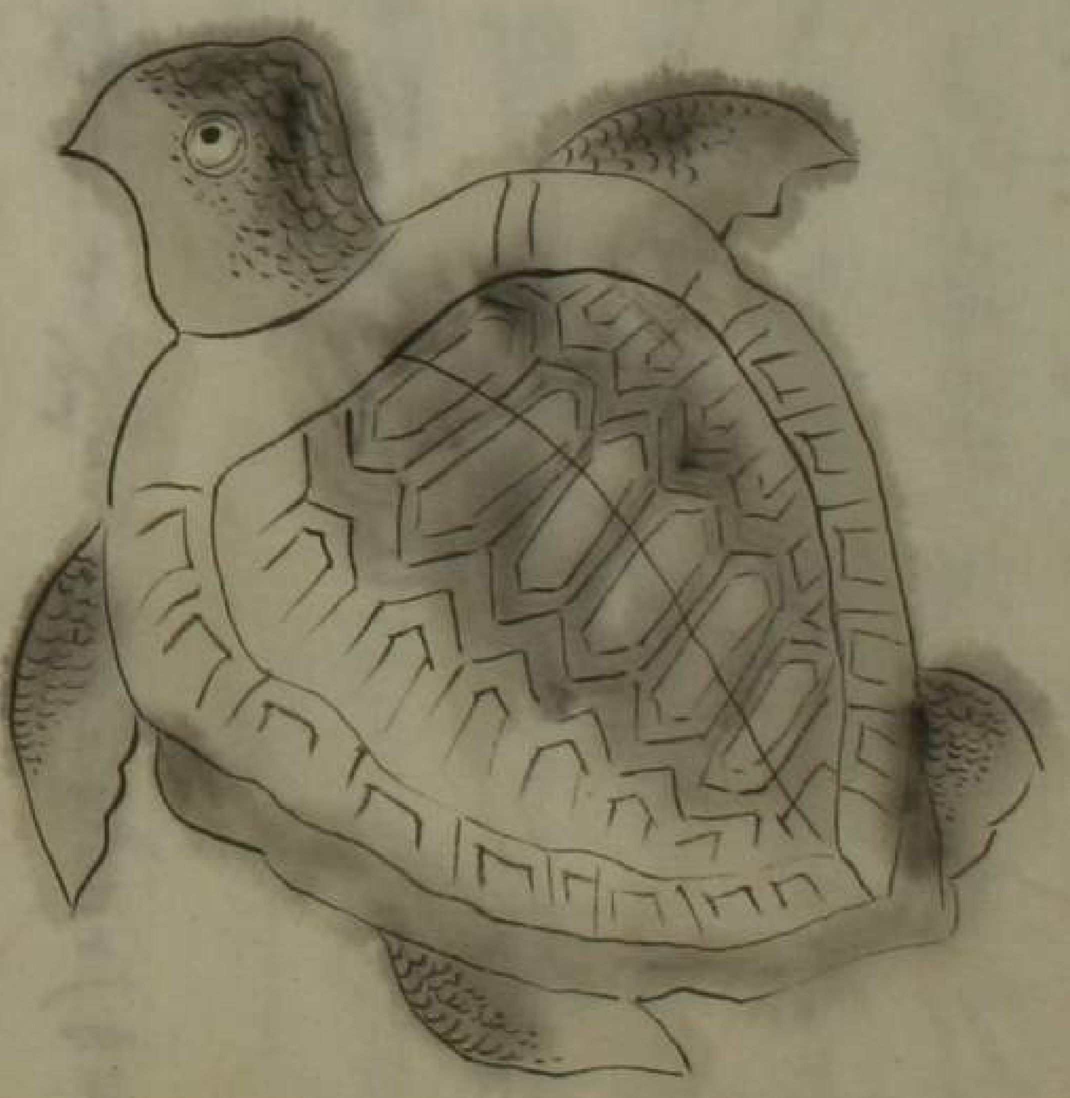
きたる泳中を窺ひ走す　魚を食ふとす

アギキトヨシ　スハウセ　鋸淵の下　本草云　青目青頬　背上有鬣

腹下有翅　虎魚所生　鼻前有骨如斧　繋物壊

船口鍋洲と云り新島の沖八丈島青ヶ島の
辺にて何れ稀に船を寄ぬることありと云ふ

元龜之圖



元龜モリと云ふ稀のことなる物ゆへ寫しおく

カメ

小亀亦此生する物なり圖ノ一二尺亀人捕りて
食ふと云り今島々にて捕るもの一二尺より七八尺もあ
る暖ならぬ物にて甲をつきのけて沖にて焼き食ふなり
名前し此元龜の小さき物也海に浮遊上く
モリとて寫は略す是迄に替ることなし

アカヽメ

鯨

人捕りたる事なし
冬大鯨二つ三つ宛連て海岸近く來る

イルカ

海岸に数百群をなして嶋人稀に捕來

ムツノ魚

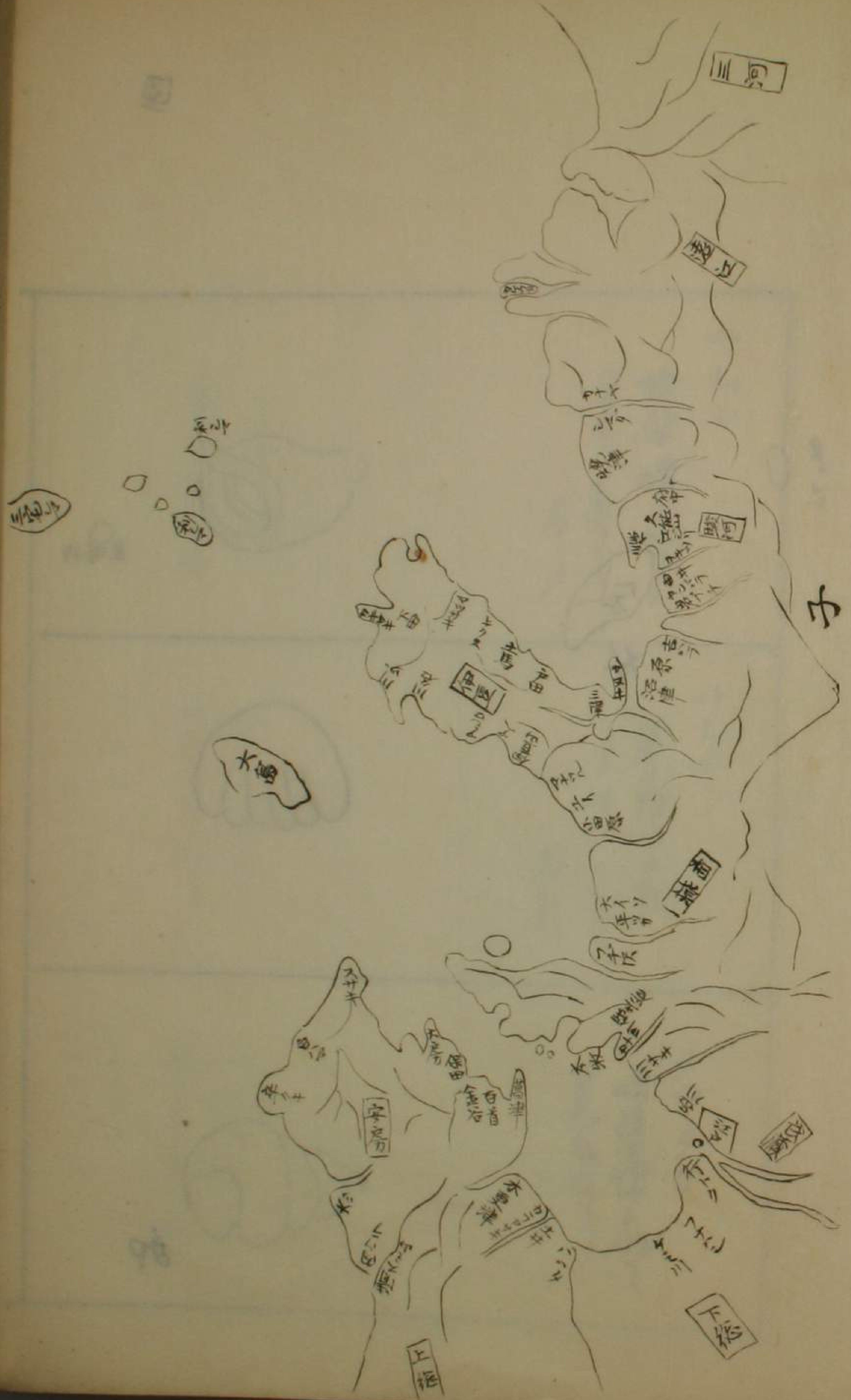
しかし沖にてこれも肉を食ふ

蛸

トモ魚

海老

近年多く出て大明と云り



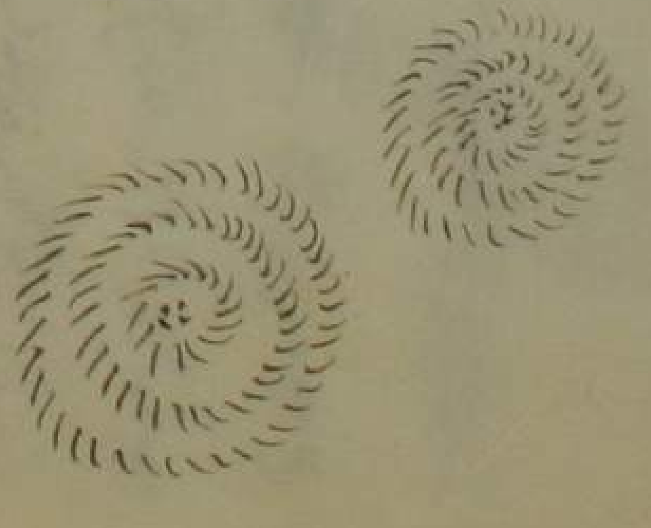
右鯨以下の六品当地の物にあらず

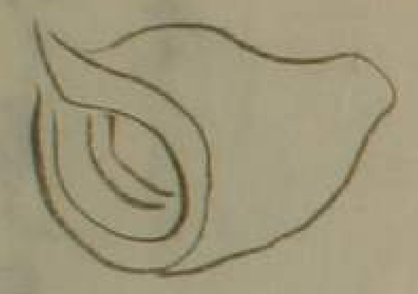
アフキ　又トコブシ　海に採りて擱る　殻を肉醤とし肉を
塩漬にし鍋へ入食す　民家の器となす八丈島し

貝

イラカ　躰ハ黄色にて和らかなり
貝なり　生にて食す
色味とも　イラチカに等しき

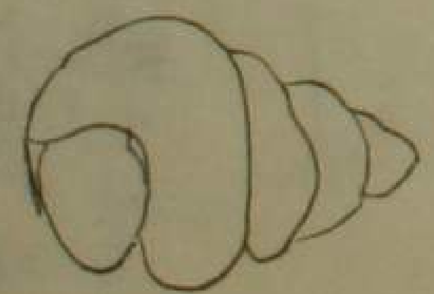
イルサル　貝なり　肉赤くて和らかなり





ニミン
味噌螺ニ似る
貝より薄く
底なし

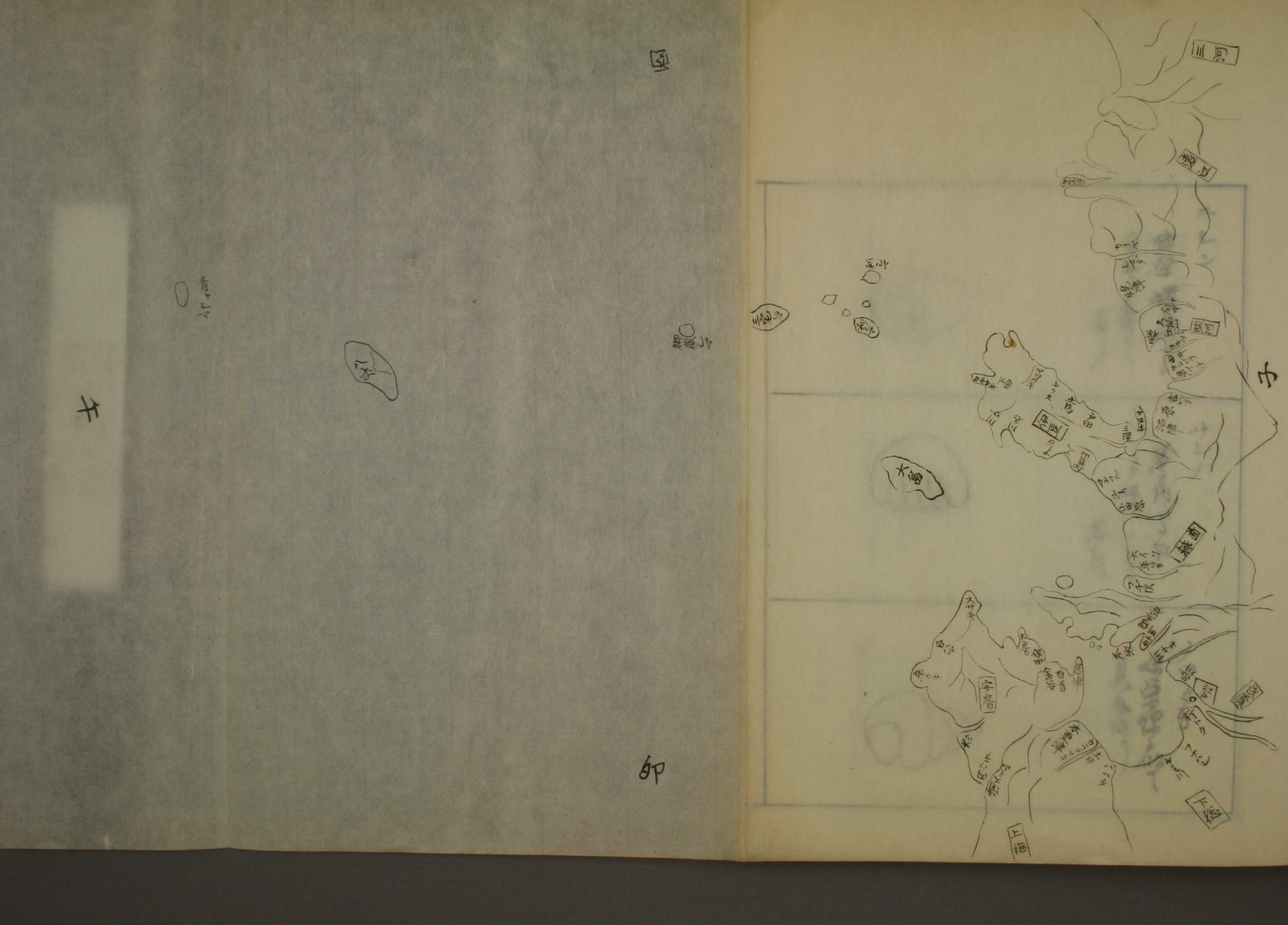
サヒメ
岩ニ付くもの
蛤の ニヒミヨ
[illegible]



メツタカ
味噌螺ニ似て
臭気有り

四

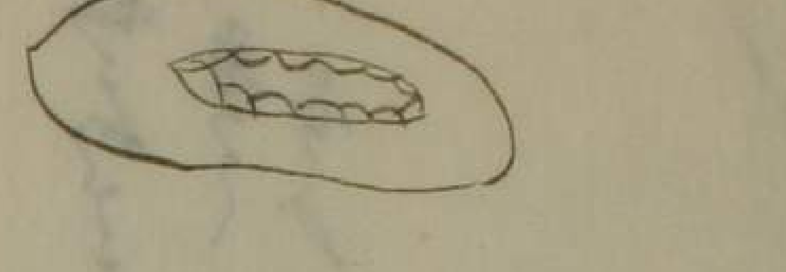
卯



子
午
卯
大島

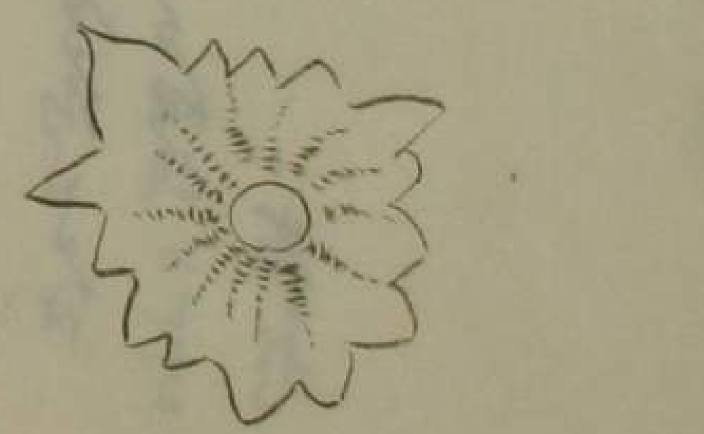
コゴ

煮て喰ふ肉かたし



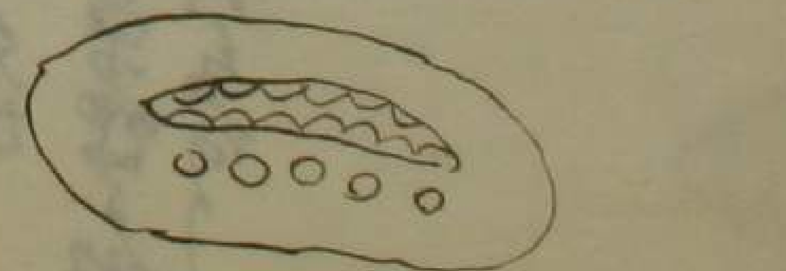
タバコ

味ひメツタカより
かたき肉あり



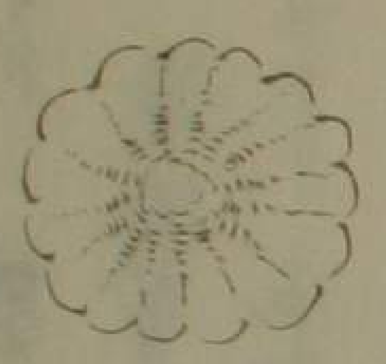
ツチコゴ

煮て喰ふ味（アワビ）
石決明ニ似たり



ヒラミ

味ひ栄螺のごとし
そのや

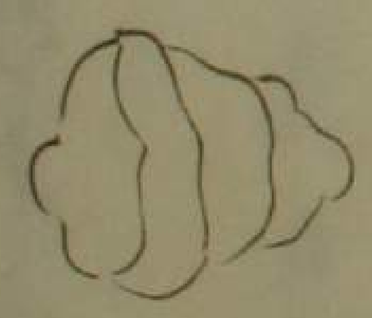


ウツセガキ

セノカキの味ひ
なれとも 気何り

ミダレミ

栄螺の類なり



ハマクリ　子安貝より亜地の物より大之ニ四寸なる
食なす
セノカミ　カメノキセイ貝之　浪打際の岩など多く有り
味ひあしくよろし
蛇
栄螺
当名不詳
某京より八丈に渡し　大島三宅新島等多く国地の
物なし
其物至し　八寸の程よりある者何り大き篠
何り　其まま二尺余にも至るもの有りて其ある
聖きまへ　読の如し多人貴むけてあるよ

生け中首の根をさし用ゆ先浮きて吹
中此なし

当名不詳　石梅　ウミマツ
海帆　サイミ　国地にはツノマタと云物に似たり　土人　石帆
珠粉干　用ゆ
ツホミテノリ　春の末海中の岩に生ず　形花此として　土人
食す　海藻也此上京とはず
不川海苔に似しやれと味の勝れり

ハンバ　アラサ　ヒロメ　トコロテン草
ミル　フノリ
右ヒロメ昆布ハ丈余ニ至ル 大さ新[illegible]如し
ツノ何り

鳥

クロバト　此ハ鳩ニ似て色黒く首ハ白く背青黛
の雛あり 鳥類あり 菜豆穀ヲ食ひ山ニて栖の
実物好む 島人捕て食ふ味鴨のごとし
ミラブ　海鵜の類也 大さ長 嘴長く群飛して

羽ともに六七尺 洋中ニ浮ひて 魚を
とり食ふ 土人是を捕て食す 味ハ 魚肉ニ
似て又生臭し 頭ニ角あり 二人ニて持ち 此等
群居て 帰るニ雲ニ似たり
子ツカブナ　海鵠ヨリ 海岸ニ 群飛して 魚類を求
羽ともに四尺ほとあり 岩屋ニ巣 此ものハ土人
食せず
カツホトリ　海鵠の類にて 色黒く 能魚を取て食ふ 此
翅長く 首ニ白き 羽有り 鶏ニ似て
きハ 此者有る 肉甚に [illegible] 味ハ 良からず
るもの [illegible] 兆有

鷹　大小何れも丈夫なるはよし

鶚　鳥秋に音入れて四季ともに鳴かず
静かなり

林鶏　三月より啼き初め何れも鳥の鳴き声なし

大小あり　大なるをカラメと云ふ　小なるを
小鳥の類かすかすと云ふ　巣を作る

鳶

鳩　雉子ハ下家鳩何れも　雉子の鳴声を真似るにや

ヒヨ鳥　ウトメとも云ふ

ママ鳥　唐ヒハ

鴫　鶴の類ハコツコメと云ふ　山コツコ　磯コツコ　黒コツコ

赤コツコなと云ふ　いずれも鶏（ワリト）の類なり

シメ鳥　囲白　ホウ白

ツバクラメ
乙鳥　雀

ツクロウ　ミミヅク

雁　小鳥の類にて地より鳴き立ちて飛ぶ
とんで十月の末に渡り来る　八丈島へ来る
何れも外より来るもの　沼田の水辺に集まる

鴫　青首　羽白　小鴨あり　八丈の島まで渡り来る

トキ

白鷺　八丈島にて見る　沼田の水辺に集まる
　また白し

鴨　三宅伊豆の島にも多し　八丈島にはなし

ハヒラ
杉やまき　葉のあまく
葉まるく　すえのふ

右壹ヶ所ハ十二ヶ所之皆園地の様ニ同し
一八丈島ニ白鷴と云ふ鳥有り　形ち雉子のことく　尾平
及ひ氏ニ出所有り　其外　雁家の　末種を　喰ひ　様も
数年より　常ニ　心を　用ひて　これを　守護し　松所自由
こ食ふ所ニ　無人　家作ニ　松木を　用ひて　此余　無
出異路気　北を　見る
一獣ハ　大島ニ　異なし　其外も　牛猫　鹿なとあり　無し
大嶋ニ　馬ニ　無き　馬　有り

ハヲノ木

丈高く茨刺尖なき物にかわりなく
離れも節々條有節となる

ヲヤマ

大木に成る十月
細花咲き四月実を
結ぶ島人薪に伐のこ

サイカノ
藤木の類
實ハ皂角の如し
故ニ此名あり
葉の細微なる
似て別種なり

ソロ
南北ノ状ち 棕櫚ニ似て太く葉も又廣く
數多し 百年余の種もありて 三丈余長ニ丈下

春ニ至ル時は花咲實ハ龍眼ニ類す 大人
三ツ目を御手ニとりて實を砕き試ル
麺粉あり 若枕椰子ならん知れる 桄榔子本脱読
乃とし 曲竹ニい此等あし也

サクトウ

山中ニ生テ大木ト成ル葉ハ槐ニ似テ巻テ造ル仲夏
花開キ秋ニ至リ小実ヲ結フ蒴芽地様ニ食ス
味ヒ苦ナリ

アカイノ木

山中所々ニ有リ木性桐ニ似テ和ニ有リ
土人框箱抔ニ造ル

イツチヤ
俗ニ ヱゴといふ木之実形緑なれハ油をとる又實を
採し小鳥の餌ニする事有也

仲春花開き季夏ニ実熟す木之 細く立延し
二丈余ニも至る梢心のあくまで たちまちのあり 用木
にするも

ヤマハイ
大木なり花ハ春開き実ハ秋熟す土人此実の油を取す
肌ハ欅のごとく紋あり此実白くして搗きしぼれハ蝋のごとし是
を油としてろうそく常燈ニ用ゆ火の光り明らか 土俗此木を
て其汁を薬とし 詰れハ漆のごとくなり 物をぬる事によて食す
光沢あり

チキノ木
大木何木の肌を摘ミ似て白く赤し
枝葉ハ茂れて息するなり 枝葉ハ木のごとし

マタヽラカシ

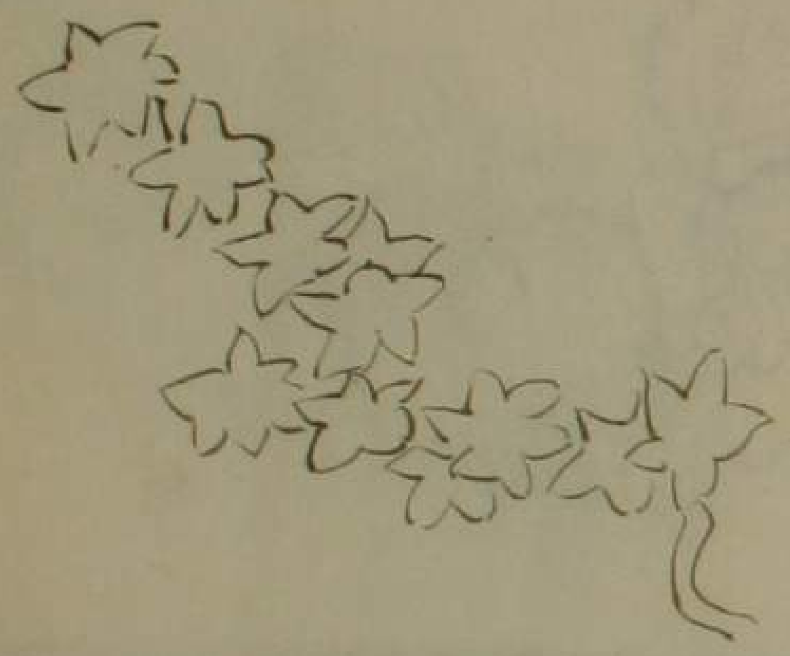
此青ク似く葉の類之土人此木ハ箸ニ削ル
斑文を顕ハす故箸とす

カゴフチ

本性堅く筆ニして折備す土人籠筒の椽と
まして其名をよびて唱ふ八月ニ花十月
黒色の丸の実を結ふ

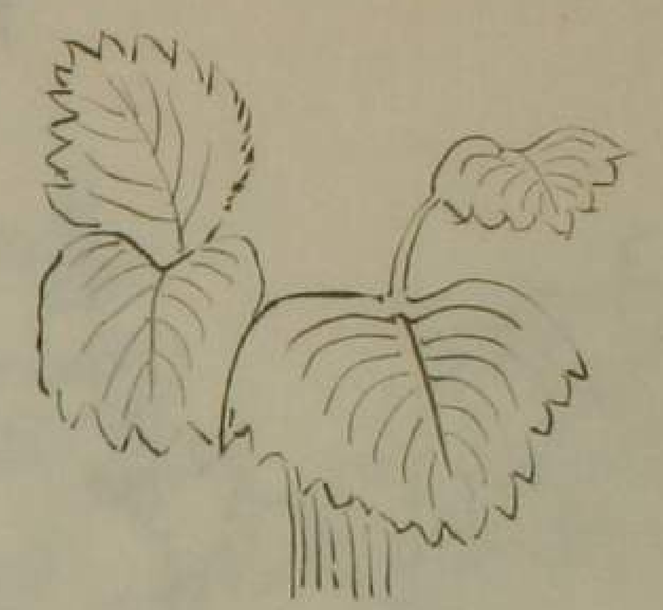
ウレダミ
山本深山ニ生ス園地ニテイヌリスと云木ニ似たり
用来ることす

ナモミ
草耳ニ似たり田地
ニ多くムクラと云ふ草の
形なり

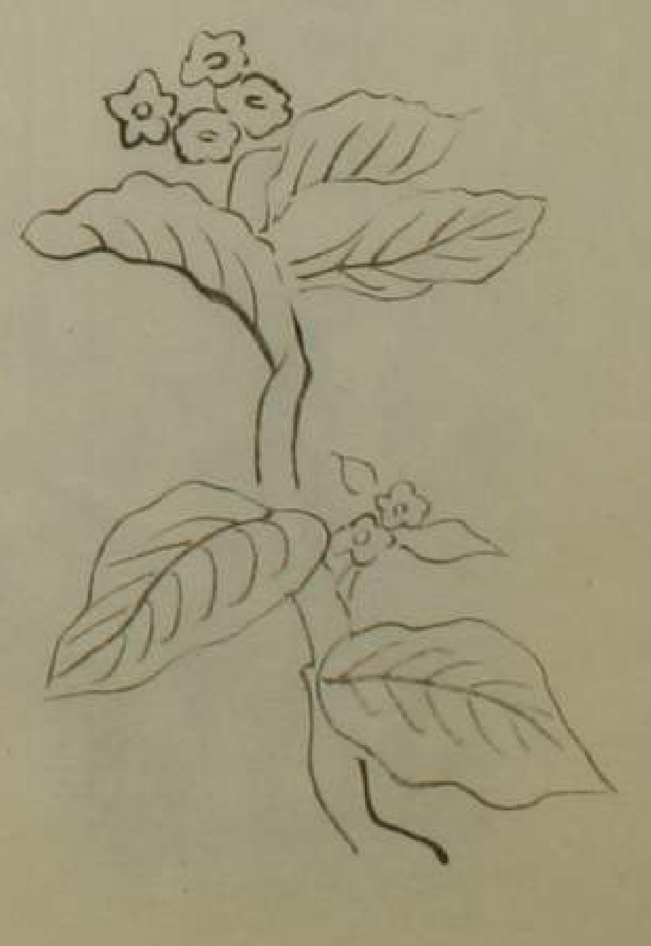


針ソロヒ

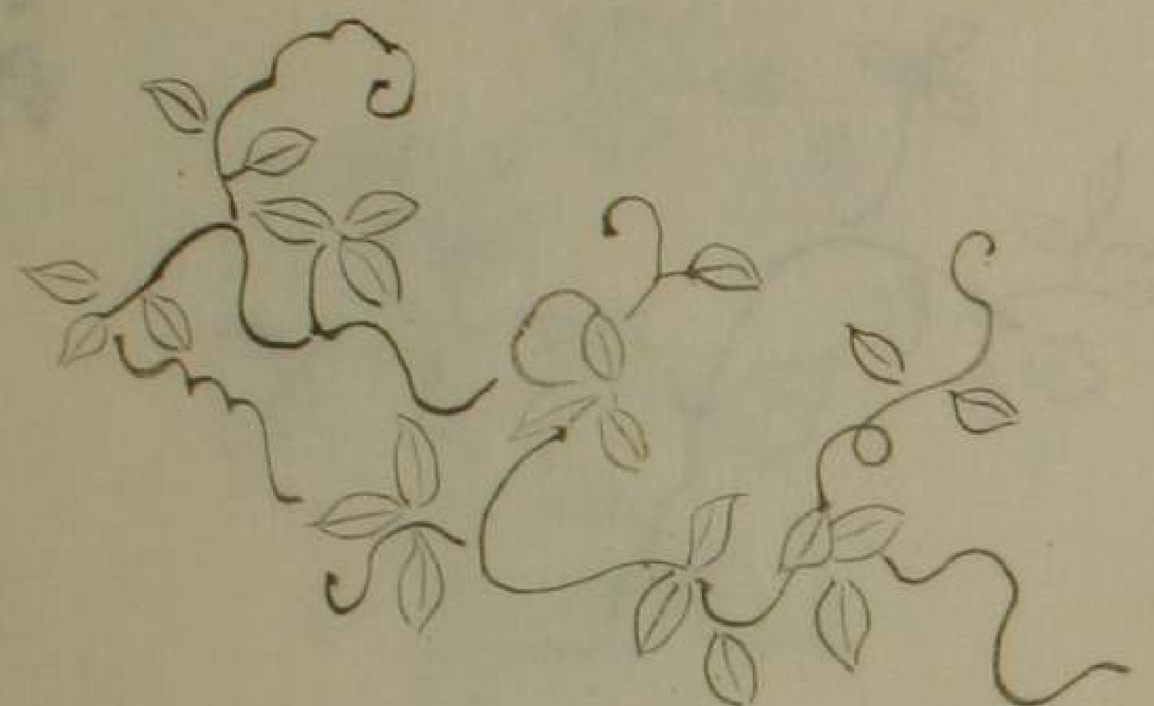
ゼニ草



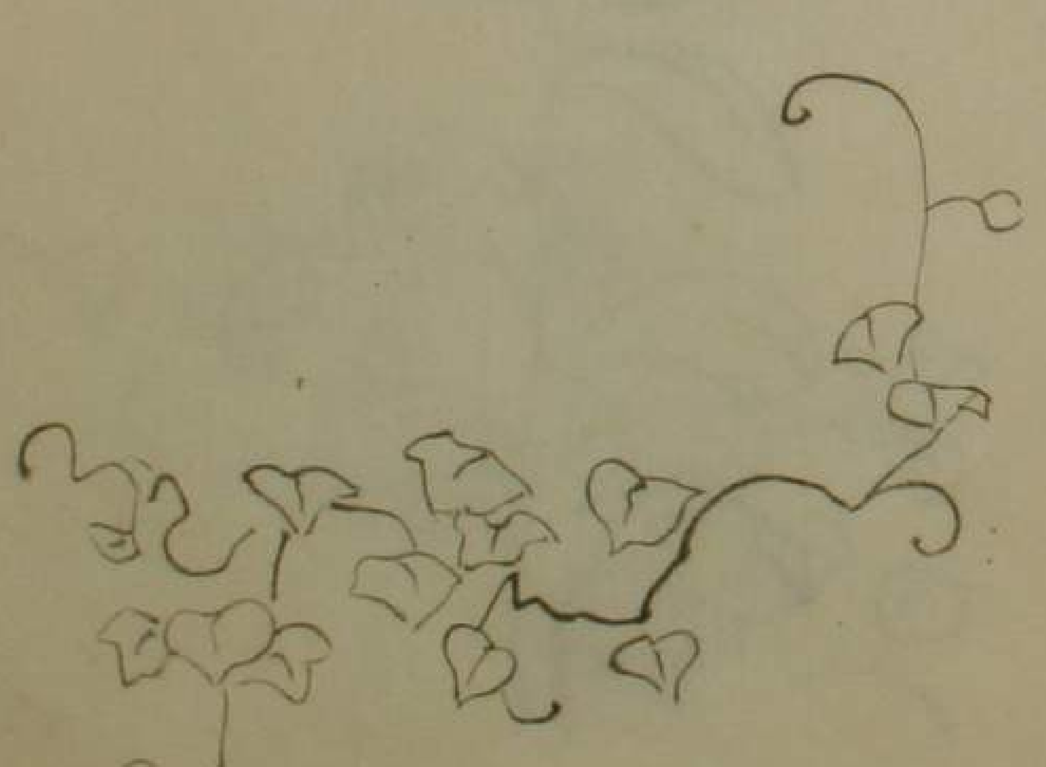
ノッタケ



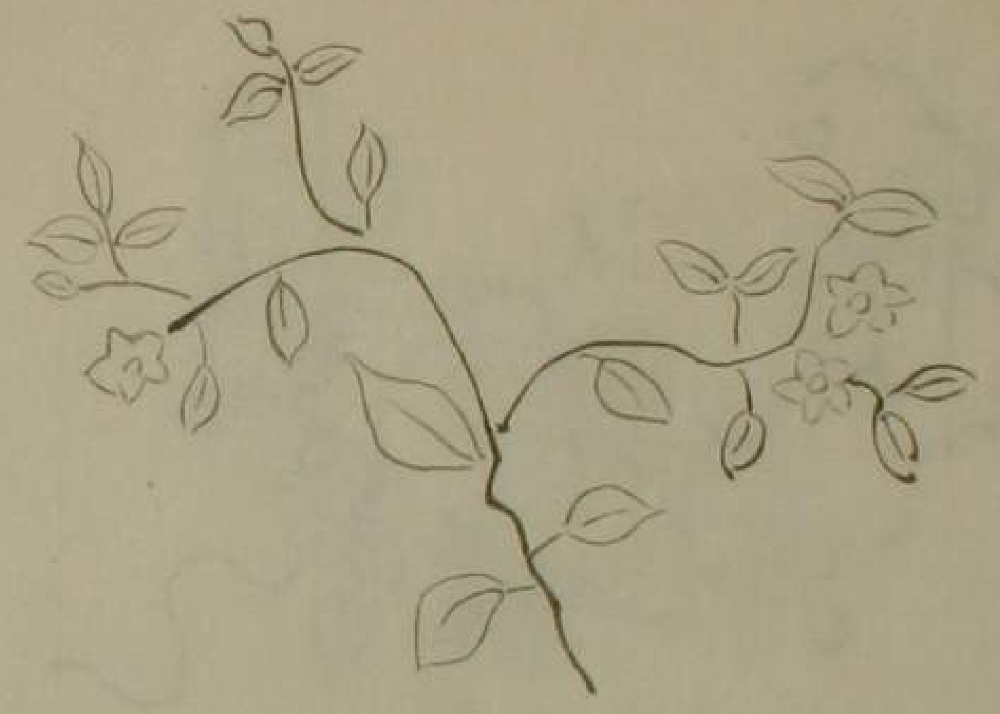
フチクサ



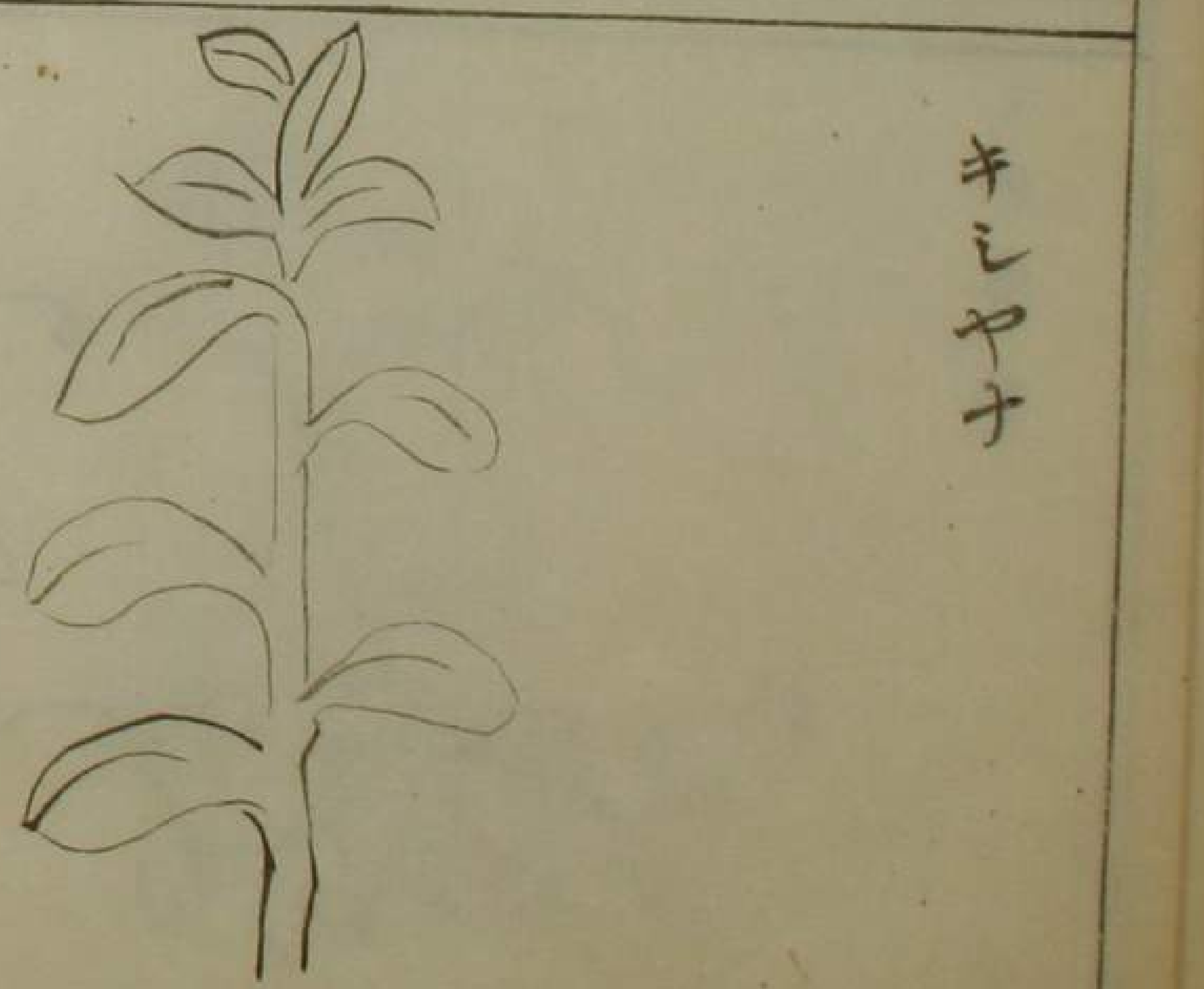
ノヅタ



名未詳

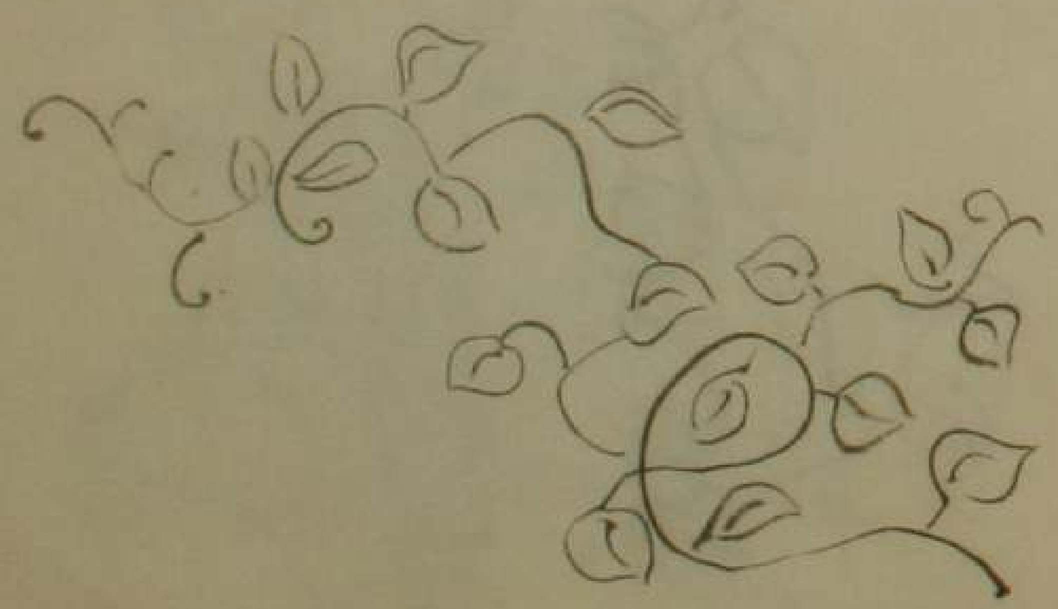


キミヤナ



鐵ゴキ

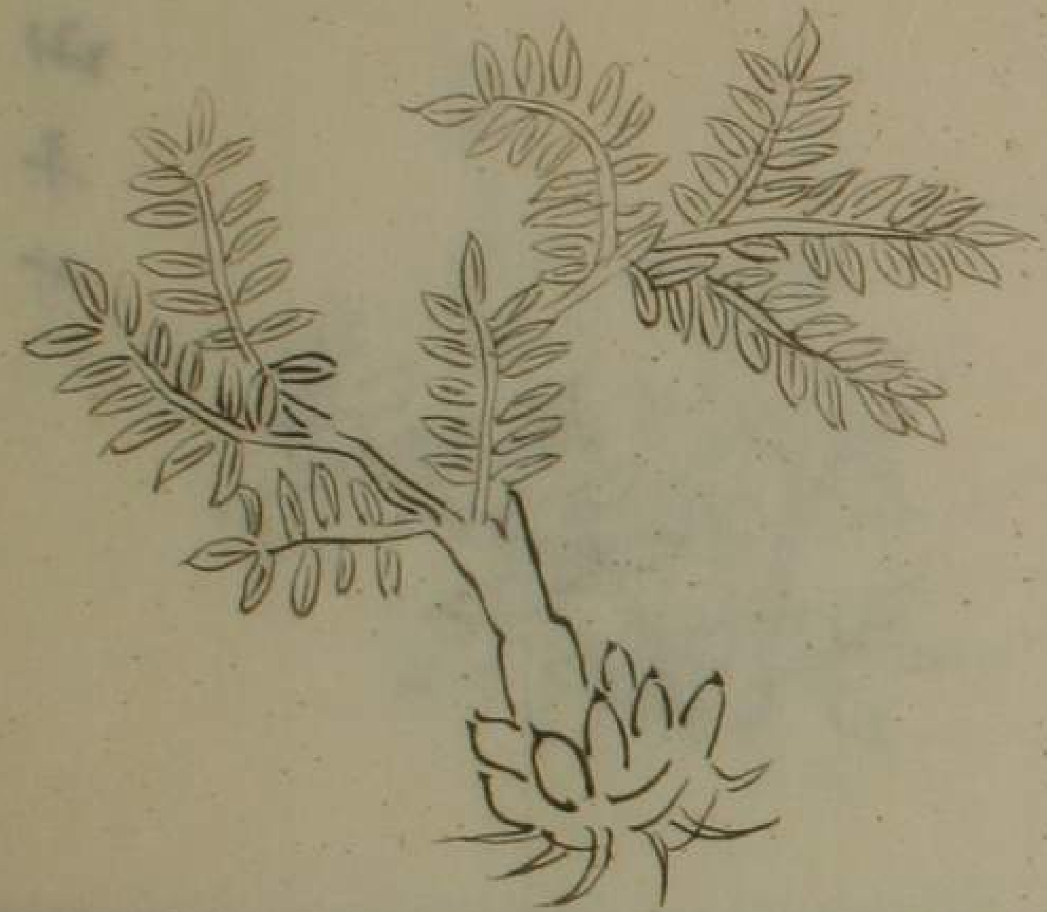
クロメフジ



ナトケノ耳

山シリ

名不詳其根を水干して
多ハ根にも香気有り



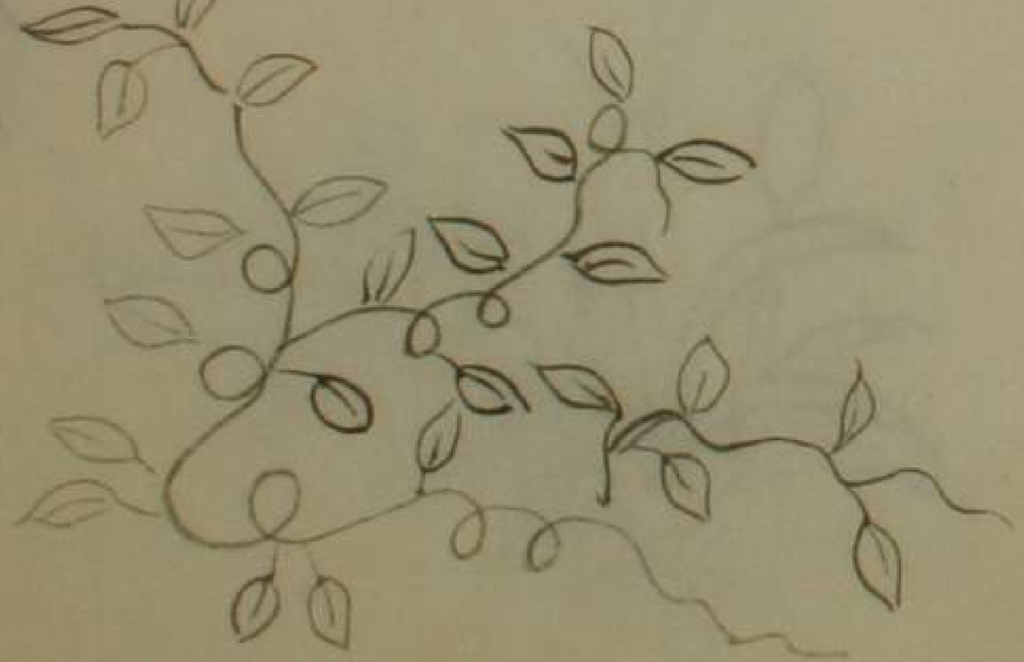
コマイサラゲ

山チサ

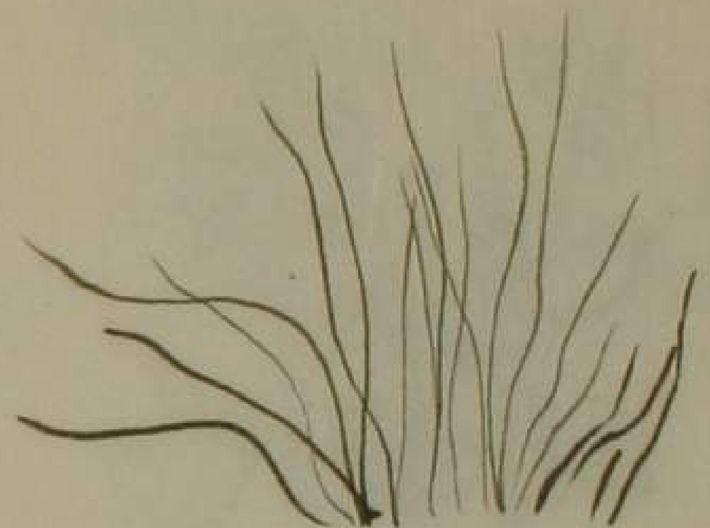
松果屮

サイカツタ

マサフジ



ノコキリシバ



アカイノ

シホウ

ホタル草

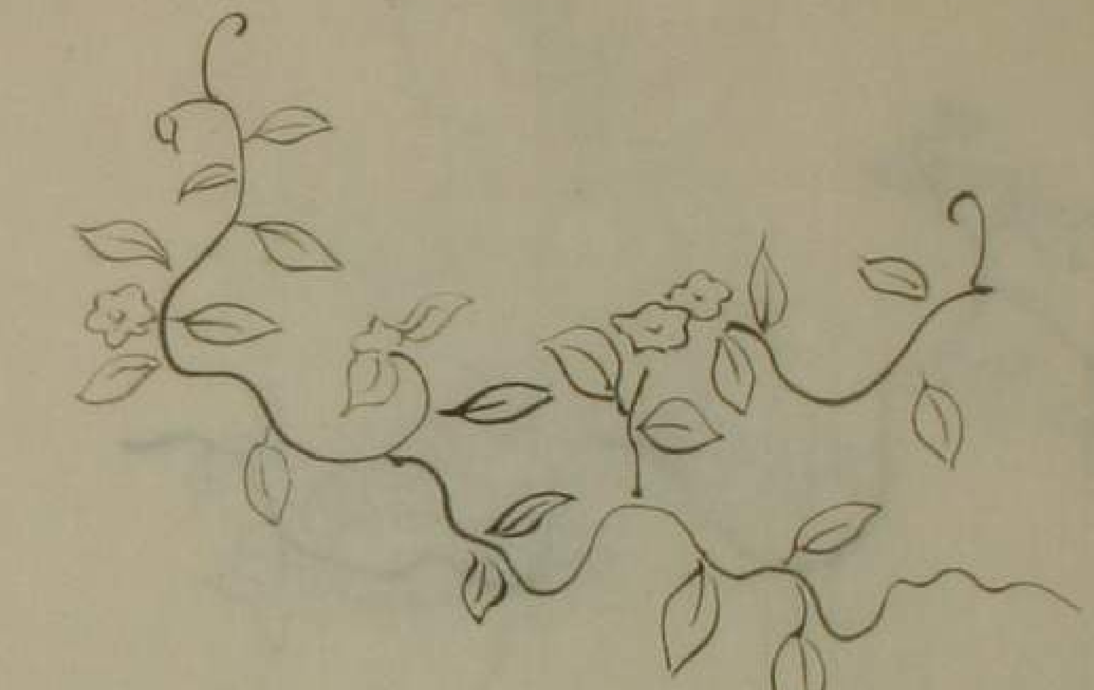
オリハイ

ケトウ草

シコハラ

山カツラ

ミミツチ

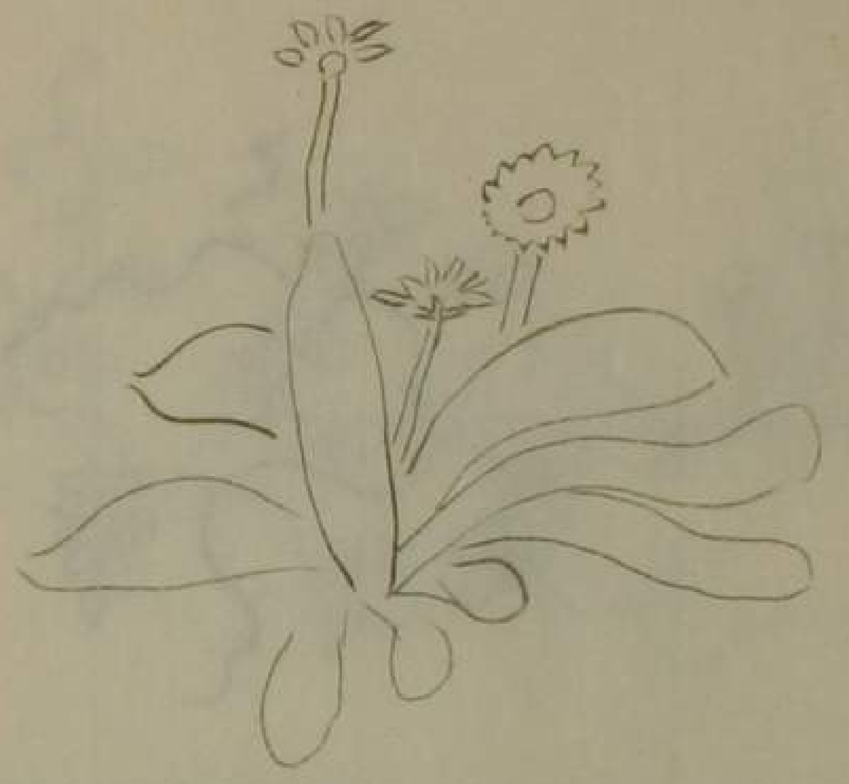


名不詳

あクリ

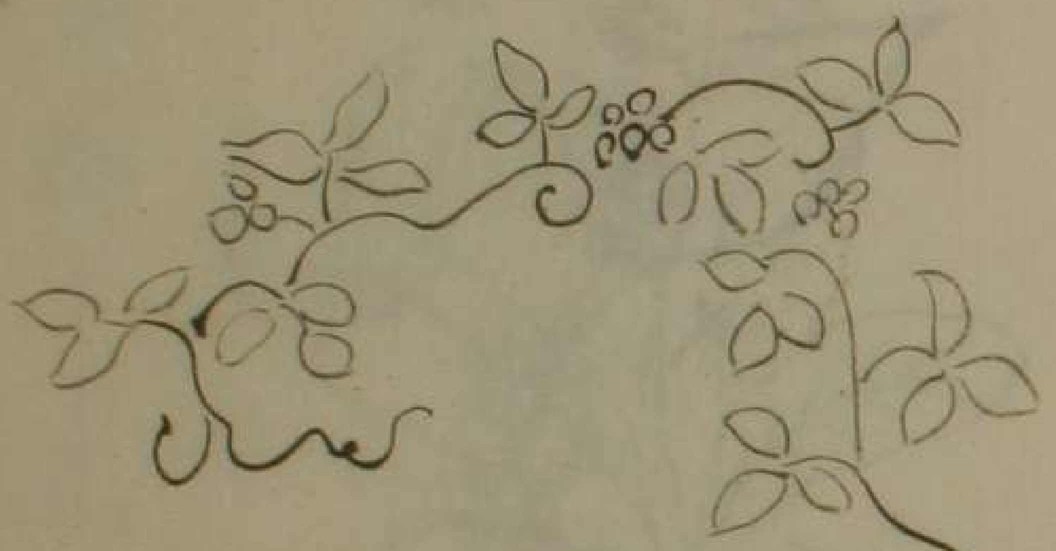
葉草

丸チブナ



ハマウルシ

カツラ　葛の大なるもの



ハマチしや　萎蕤の類

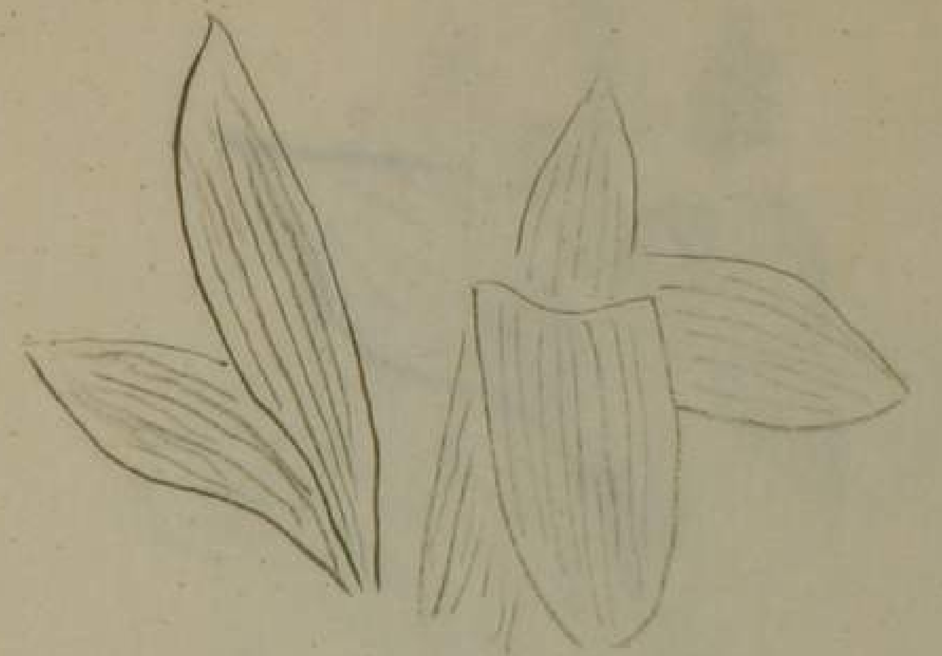
チフナ

マホウキ

流シバ又ナカテシバ
エヒ子の類

島名不知
万年青の類

名不知
葉蘭乃類ニて小葉也



牛アイタ

アシタノ毒性とて人畜とも
しく食し難し

海島風土記巻之下終

右海島風土記を著述をし人の姓名を記さずといへども
豊前守を勤むるに寛政六年三河口太忠 兼し候時と代官に
公命を蒙り島々へ渡海し八丈島にて年越し
明る七年に江戸の浦に船を入帰るに依りて此の
記の中に農作漁の水利他論し他島を憑し
兎角とせしまでのりかかる事を其所を同る人あらでは
難し誰が事聴きは三河口の著述なるべし 三河口が島へ
渡りし此古尾葉も誌すとらふ甚楽の人性果てしゆきとし
此人関ならずとも博く物産の事までも心をとどめ述ぶるにも見ゆ
と申す此海島記も此人の思ふより先にはも
三河口記は然るべし
島出りせし人々は論じ及ぼしの如く新文編撰 公倉依りて
ひし人も則く島々の事実を明らかにして地理物産を

志しの深きへいとゆかしく思ふ事を思ひへられしを
公の御恵み有れは海島に渡りける時に廣安の
流行せしも是れ迄とし人々も実は病に渡りて
集りしに新海島の記を写しやうやう来り給ひなん
新く其島へ渡りまでくは七島の事を聞合せある
心地なるを三河口が御大支とも写し我身も此記に
集録しみえて伊豆国下田の湊より何の方にも当たる所
何十里沖なるや何の方に当り海路何ほどと記し
如是にて甚だ便なることに見るにも能くして何て其郷
大島水戸の赤水の輿地の図の如く海島記に記を
して海路の里数を量り見るに便なる為一枚の小図を

是より弥又青ヶ島より遠南にあり岩山にて人も住す
島〔此地より海程何十里とも不知〕享保四年十一月遠江新居湊の舟
子十二人乗の船上総の国九十九里浜の沖にて暴風に
遇ひ辰巳をさして吹流さる事数日にして明る四年正月
此島に漂ひ寄十二人とも陸へ上りしに其船ハ更に取り
端舟も風の為に岩に当りて打砕け帰るへき便り
なく生つゐ只何となくあきれ居たり故採へ上りし數多の
居しけれハ手にて魚鳥の肉を食とし又落穂も
採をし後ハさらに漁を経て手に渡ひ岩窟へ住と
し死の冥ひハ其を思ひ此渡りを秋と定め夏き
年月經過し内九人は追々に死失三人生残りて江戸

堀江町宮本善八か船に乗せし舟子十二人悪風の為に大洋へ
吹出され水尽たれハ是非なく彼島へ船を寄せ上陸し
新居湊の舟人十三人にも又不思議にも又吉の身
あれハ昔居たる物語なとし此度ハ後々八丈島へ渡りさし
より御国船に乗せられ上総の沖にて吹流されしより廿一年
目にて元文四年五月湊に帰し破船にて再ひ本地に帰
至る物語り甚後此上の湧慶く至無人島の沙市へ
御奉行所へ来りし書物改し取文墨
正月中旬貴には是を書す無人島漂流記中と題して
紀子或書肆御風土記を被人借写し入れ
是をも書写し無人島の記中にも写入て徴となるとハ

扨又寛政三年豊後に長崎に在勤せし比島尾市兵衛
薯諸二面三分段也といふ事を得り此人の先祖市左衛門なる者の家記の比
公命を蒙り琉球へ渡海する其人の島を視探すべしと航海し
船を寄せて此島はわと大なる島にて周地七八里計山林
もあり又紫檀肉桂ともいふ香き木も有りしと帰帆の比
初めて大日本属島無人島と大字に書き勝手に年号月日かし
長崎住人島尾市左衛門と誌し傍示を建置しと物語
此市左衛門より云ひ伝へし事有りし又天明の比は薩摩住佐藤
五六江川太郎左衛門の手代島をも此の代官の手代なり皆川伝右衛門の抜子沖也の比は薩摩住
作佐衛門与人又無人島へ渡海せん又役へ申し上ると公儀へ伺て渡
海し彼島へ近くなりしが暴風の為め破船の為め吹流されて

此より船出しぬ彼島へ船よせ船に寄せ其島と大なる家
島也それと海辺岩窟へ船を寄すべき所なりければ
とても船を寄せんとすれとも船を上げる又大風発り八丈
島へ渡りし事再三渡るとも代りしもせず帰帆をしとりぬ
事なり然れども此島を掛合の兵其前は其儀再の異義
なき事なし無人島と申すは世中なら小笠原島也
今も其所の世人の孤島を庶らせし其人船を献させて
国地に帰すべ此にて其もいかんぞや

無人島漂流紀聞

遠江国新居
筒山五兵衛持船
船長　左太夫　四十歳
舵取　甚八　六十七歳
水夫　善三郎
善太郎
八太夫
平三郎
権次郎
仁三郎　六十一歳

平三郎 四十三歳
炊 善四郎
八兵衛 南部にて雇入し水主
権次郎 伊豆国岩地のものにて南部へ下るに付便船の為乗組

右は遠江国新居湊筒山五兵衛持船の船長左太夫并水主
便船のもの共都合十二人乗組享保四年の秋南部領陸奥
閉伊郡宮古湊にて江戸廻しの材木を積請船出し候
領する気仙湊へ船を寄ここにて順風を求日和よけれは
帆を上本吉の唐桑山 水晶の出る山之外天の説あり刀剣を研し尤誇るに足るよし 一丁半程沖
に船掛泊りける一日一夜ほかり過すに小竹と云湊へ船を繋

き十月廿六日に此湊を出帆し其日晩は上総の国丸里
まて走りしに暴風吹出し頻りに波を打上り又も海底へ沈む
へし船の中へ走り川渕の如くになりて何国とも知れさる所
島山かすかに見へしゆへ其所へ船を寄せんと帆柱を伐の播上は
彼島山へ船を寄端舟を卸し乗組て若二升黒岩へ乗く
端二ツ室に食物を入是にて筆島山へ上りしに忽本船 千石積二形帆船
端舟とも岩に当り打砕けぬここにおいて途に迷ひたるよしされは
人家もあるやと所々を探し求むれ共人跡もなき島へ
島にて住むべき気色も見へ岩山のみなれは清水迄もなく湯屋せん
る根おこなひて名心細き苦しみあへり
一此島へ渡りしは明る年五月十七日の比と覚へしを揃此島

未の方より丑寅へ向ふて東西とも十四五丁程といへとも
周廻凡一里程も有へし 東西とも岩山の嶮岨にて平地の屋ど
江へ文殊堂より一二丁程上ニ洞穴二ヶ所有 一ツハ横二ツ
七尺ニ奥へ廿間程 其一ツハ是より小広く西海を見下し上ル
の方高き六七尺人も何処也

一 此島風烈しくして大石迄も吹飛し茅家をも損するゆへ吹き
荒く所との事風聞は遠く竹木有とも家ハ尤も成
へしとも覚へされハ 此年二ツの洞穴ニ茅葺を設
六人ツゝ居りしを 住居ありしなり

一 水ハ天水を待足らす 溜池清しからとも白海岸へ集来
船の繋り悪く揚かし 船行陸地の何れハ見えし岩

と専ら天水を囲ひ常ニこれのみ大切の物として用ひける

一 食物ハ魚鳥の肉而已にして着服も鳥の羽を集めて 大鳥ハ大きさ（南紀の八ヶ浦）
（と此島にてハべいといひける 伊豆にてハ）
（伊豆の島々にてハ沢鳥と云 アホウドリとも云又）
枝まて打殺し 鶏を割ニて 肢と翼の裏まて 遠くに
汲ませて煮て食とし 又此鳥の羽ニて 沙溜く 一羽の沙
き掘ませ 三度ほど食して 大概十二人の食料ニ 一日一羽
或ハ二羽ほといつゝ 十分なり 又魚も大なるハ一魚ニて二日
三日の食料となせしもの也 其名ハ何も知らし（鯛鰹ニ似たる魚）
（鯛と名付）風味もよく 又大さ一尺五寸程ニて 鯉ニ似たる魚
（と名付 鮮）これも 味も鯉によく似し 又背に鰭ニて
勝なく 味ハよく 五寸斗りの魚（世ニ卯魚と云ふ）又鱸ニ似て味よし

張き魚（ねあらや 名づく）其丈長さ一丈斗りなく頭ハ形の如く
尾ハ二寸長さ四寸ほとの魚（本邦に謂 魚をなく）又長さ二寸ハ五寸
斗あるも 魚の字一の字頭形なる魚ニ丈九曜の星
頭ともに紋のある魚（字の魚を名づく）又長さ三尺位の鰊ありて
其小魚鰈多く海ニも湖にも有て食料とするなし之

一 魚を取斬を曲げ帆を張揚とし網を引し値ちとる鮑
を用ひし取り ミカベなるの副賞を海へ投けハ 鰐なる魚
集る也 鮪なとの類の事ありて 又鯡の如き大魚を網
小さき釘を太く撓へて是も丈夫なるを用ひたり

一 本船より海へ上りし 常火燒を指まを入に岩なる竈
を築きて揚置し 毎の 枯木或ハ流木を掛し 本柱取干し
乾し取へて以 薪火の 絶る事なきにせしめたり

一 此島の所ハ寒けく 土用は之と実へ寒気を催しける
掛ひ傍らけき

一 ミカベなるは 駒鳥 碁石を並べし如く 群をなし居れる 秋の
山より居ならし 其を海に游かせれと別て 酷暑の比 三月
頃ハ居りても此比ハ 海を泳すも 鯡をとりて 餌となし 之

一 貝類も法不用 貝類のごとき小さなる貝
法不貝子安貝 唐螺 平貝 拾ふし いつきも 食料と
なし 又海苔ても 取て 食ひとなりをしたり

一 凡三年 取とる 住居をなし 覚へし 此条 拾ふし 無之なし

人も居さる舩寄きてを岸の側に舩つり是地ノ丁ニ来
苞のまゝ是は湖へ沈めて置く事数日にし六七千俵積み大抵其の
跡と云ひ干乾し是くの飯粒となりて又向所一苞宛
藁つゝみ萱筏出しけれは舩行無火に備て打出し虎口のごとく
振りは是後継ぎ名つけ岩窟にして穿ち二粒三粒宛ありて水
に得或は潮を数日腐し汚気抜きてこれを以て酒をかもせ
魚の骨を肥とせしに甚だ此と相成りたる此種をもゆへ熱
猶もしゆへ種を存き一年ゝゝ米二三斗ゞ出来たり　舩行を岩に研鑿となし
其の本筏椎に振へ本筏不しゝ名の丈ヶ所へ火をの焼きたる之
ま御ゝあるし籾の内をまて粉籾まゝ類合ひ内に保室備たる之
一魚を釣し所を西の里数年ゝ小ゝの数天水島数西
乃出岩穴の口小の小ゝ数西乃釣場大岩前の釣場大屋敷

大天元年御供(?)勝間ともつき東爪切株と其所の掘穴
以前より在は釣場と成きしへ
一室の掘穴はいつも(?)日月星辰雷降る雨地に響
く所し是響りしを風雨に支折し氷降てあり飛も来
清水ありて又東雲赤みしと思へは来る夜明け日光出る
天地より寒さしよふなし
一多葉籾の穂も似る長さ四五寸位の草此島に何と
云ふ草なるや天地より植ゑしは是もの是が干し草を籾
と名付け種石　塩の瀬を用ひ　抛りて火を取り　萩等或いは
カベの皮細らに為し一年ゝもの間これを用ひしが口中へ
降りしゆへ止めたり

一山の上湯煙り嶽のことく常ニ烟燗之昇る處或沖時と
雖も百日ヶ間垢離をとり島中ニ而團地へ帰しめへせし
一日新葉を拵へ置し
一年貢決算するニハ秋より而中より北浦へ納め此月々
宗女来り日毎御泊りて昭文月の満るを一ヶ月と見
へ之 其日毎を以て精進日分とも取りしてるニハ鰹
米御膳ニ焼きて食せし之
一温泉も有れと燃湯ニて浴しける能とも其邊の病利
を除除一毎浴浴きし事何ぞ
一島雪霜の降る事なし 又高浪ハあれとも海底の石
打寄る音すさまじ 其他何ニ寄る物ハ無き事也へ入見る事

祝の事なり
一島中地獄し甚く跡迄も海行るか如く 深海の
此辺の海を見渡の船く見ゆへ 程なく波ハ第ニて
草鞋を作り用ゆる
一在島中地震ありし 一段笑ける これハ至極浪静る家
日ニて何ぞとし 又鶏の老鳴事之卯一人を見たり
一山ニ草の木足ル大さ五六尺又ハ二尺位なる鳴るが如くに 九十月
比と思しき比実熟し 十二月比まで何り其伐採して至る
渋く喝ニ譲り度る後ハ食をし又ハ煮て食ぶし 茅も
生えて花を團地ニ實する中なり 又 飲食湯に蔓（此蔓ニて縄を拵へ用ゆし之）
兄文東ニ似る實阿む事ハ 草あり是をさまざまと名付

子食備し去り又各自郷土風俗を伝へなどあり
能く之ナキと成りて又蓮の如く花咲て後生るなど
これもイツキと名つけしや
一 シカベ湖なる秋と申しき比 海にまで海の一面に丈へ一尺ばかり
上り十五六日もうたて卵を産むこれを雛と成るは雄卵をあつく
其むまで凡三十日ばかりと其内雌海へ入る餌を取り雄を養ふ
雄卵化せし雛となれは雌雄とも魚をあさり食ひ育て雛
腹中充満する時まで 睡り居る 三月比
又卵大さ平鶏卵程にて 卵の色白く 一の卵さ 一日の飢を凌く 此比雛を食とするは鹵味 味ひは鯉のごとく一羽
の池に 四五日ばかり 生きなからもおよそ一尻にても 味ひよろしく
種子を絶つ如く果てなく 四月比海へ入る 雛を飼ふ十分に
食を足す凡五分の所は海中にて来て又水中に 腐らし又雛の内
草木も枯し 其子孫三分一を失ひたり 暑気に至き
ねまき仙台南部の地へ飛り行き 餌に飢ゑて命終る
一 本島中 焼火を以て 焼しても沖きる魚漁は也し 傳りも
多く此湖を天気を見て 楽しみ是漁 用ひ 此心は吉帆
本船 大鍋に入て 其間をあそびしより
一 夜数も四五年の間たつ風に吹き戻され 逆に
たる此羽を帆にて 湖に流されと存て 初は針も見
去りこれも折取して 浪打たせし 是にて後に 大風
廿日ばかり 此島にて 土産を 針持帰りし
一 善右衛門 船頭 船子一人 忠兵衛 善太郎 妻 八之助 権四郎 長三郎 伝介 二
八大吏 妻子 二人 合て六人なから 腫気の二瘡にて 餓死を得る 寝所とも

自由ならさる故病ミて死失ス船頭左太夫〔享年七十〕七月其儘埋
其後ハ亦も追々病ミ死し乍此後死し又ハ死骸ハ猶
ても葬り其外古来ハ之所々能く配分し又下田浦ニ於て
随分大切ニ致し一旦国地へ帰るまて我か後へ述へ事と云ひ
其外諸又六兵衛船中用意分賄〔古屋の市判之〕市判を附し死失
之海ニ至り吉三郎権次郎〔家母次郎四人也〕も死失せり都合九人の
者を死去致せし無月晦日ハ覚へ申さねとも大方ハ二三年程之
追々死失すへき事も申さぬ事とし比腰気の煩にて
今残り者権三郎一人と書き比果て相葬ても骨のみ
の島山なれハ定て猫る事とされハ右伺ひ申し上へ右
を積きぬ島の嘆きさせて大に気ちしすまへ

一元文四年未三月十九日〔此年号未月日も知れし成遠へ漂着し其後の船の人の話承り記したり〕島を出帆
甚八平三郎を依如とんと出帆仁三郎ハ島の御様子
しり渦のかまて家を見の便よ
不図も島ひ振をかすり立出見れハ国地の人三人〔此三人江戸船之江戸二〕
〔丁角宮中其ハ船船頭冨蔵の妻子〕立居けり仁三郎何人なるかと声を掛れ
ハ是ハ船中の者なる故参へ船頭若し衣服を与へ
なると答ふ其ふきを浦のまされハ天気を待ちて濁流涯し
傍し仁三郎なる故に思ひ其時平三郎出舟と申そう
両人立て見れハ国地の人三人と仁三郎之様子なる大に驚る
まゝの仁三郎を乗せ舟し船を何方の船なるそと
問へハ江戸船と答ふ江戸ハ何れの船なるかと問へハ堀江

と云ふ甘蔗平三郎の帰宅　堀江町ハ船ハなき筈之といひけるは
ハますます遠ひハ為ともと云ふ船ハ何地へ漕隠しけんハ深くも疑ひて南
部の八左へ行くと云ふ　其内ニ仁三郎ハ甚八か迎ニ行違ひけり
一此所へ来りし三人の者数々三人の姿ハ美しく有乱鬢ハ腰迄
垂れ髪を赤黒く歯の色白く紅羽と青色の衣を更
ニ国地の人とも思はれぬ容ちにて唐人なるべしと一人申せハ此ハ何ぞと云ふ
朝鮮へ来るのは切支丹の者類也　平三郎も
状を拵へ相尋ねしハ何国の人ぞと言へ来りし始末也
と尋ねけれハ大坂の者紀伊国の者伊勢の者南部の者
何と言ふ南部を云ふれの浪の人なるやといへハ富吉大南部
漂流中南部の者も何と云ふ　彼ハ其許か名ハ何と云ふやと尋

其ハ某ハ富吉のとのまへ名ハ宗吉郎といひ　其人ハ大坂者
申されけるを気の毒に思ひ其上にと云ふ相ハ南部へ来何ぞやと
尋ねけれとも涙を流し富吉の智人の様なるを見かハ相ハ国地の
人の容子に似られハ言葉を以て退談せんと何とも
て俣涙をこぼし居り
一島の内通ひけれハ国ひ志し天氷漂ふ朱鶴船へ
行合しと漂ふ流れ南部七之助と連之郎三人共舞を携
へ相携へ行端舟と相ともに端舟を乗り漕出し
前三人の共舞を見て何れの見えハなき也併見るハ是
三行し三人の者のハ見きれし定ぞく漂流せし人なる事を
相子細を尋ねしやと云ふ相りもまし船頭も以ふ毎ニへ国所へ

早りし友光ハ当時我居の船人と共に来て場所に帰し
人を待ハ八丈ハ見知る人二人まで居たるに生残る尾張の
の飯米船神宮丸に乗し人々て右地也又其沖ハ佐渡の
伊勢長寿丸に乗し仁右衛門 此者人ハ南部より佐渡の気仙沼雑船也此船也知る人なり まで
右船をいふハ其評定新居の廉丸に乗りし平三郎右衛門
亀せしなれハ往来物語り忘れ難し 心落つき来り
一 船長富蔵を始め六人の内も三人此者帰国 憐されし南部の船に乗
其国地へ付されんといひ居を場所の揚場を評議せし 其日
も吹きれたりしハ来り風雨に妨げ船を繋留しとて届きを
かし 一夜を明かし翌晩明日にハ船の揚船掛補理ひ当船を引
上て船主出来まて弟海上見物人漸く見へ右檣縄又ハ籐

豊臣氏甚八外二人の者の飛脚船にありしハ享保四年
十月始めて八丈島へ漂ひ着しハ明る子年の
正月廿六日の比と覚えて
寛文四年四月十六日沖
島を出帆して身の利益
帰りしハ島に居る事十七年
になりしぬ

蔓え三所漂ひ思ひ天水を汲入三月晦日と四月朔日に着
とし四月中船出の日の沖図を知り廿九日順風とて沖へ
出船なり船出支度仕り日向を離れ又沖図を船出し
初る比沖泊りぬこれ又ハ火急にて故船出帆離れ
遠ハ文船離れ沖泊船出し七日十二日より沖泊
なれり船の七日より船帰とあれとも十二日といひは
其日も風吹荒く落在船の船出に掛しに数日を
天気晴風の模様よろしけれハ船出し出帆し申
昼夜四日目に島山是ハ鍵島望み候へとも船を七日せすも地
方近くなりし来と思ふ明る日の晩に西風吹き島のみへ
見れハ帆を掛け揚ケ立て一二里漕行し南に西風

吹出し一時斗ニハ南東ゟ吹出されしゟ丑寅の風ニ替又御蔵の島
山の方へ廻りニ成り煙を立見張りし候処又此島ハ人家の住居所
有之と一円無御座候心支ま事案様陰へ漕寄れハ中一町斗も
又八丈沖開船も暗礁と掛けしも見へ又網にて取つき
船より老人二人出来り島の名を問へハ八丈なりと答へ其人
別島役人へ船を寄せしよしを注進に行れハさらに
熟しよりも中途ニ而とて船繋ニ而底濤にて来停を留る年
人足名主を家へ行き島人等へ海岸にて先年役所へ十二人
吹流され島へ漂着し死失生残りし者の三人此節年但
家まで帰帆を守洋中迄送れハ其外ハ不祥を蒙り事を尽
その子酒食被与へ其後島役人の家へ同居し有りしよし

是は富蔵船ハ去
島ニ寄せしハ元文四年
の五月廿日の比なりし

一 此船へ帰りしに船与へ島人等船へ来り跡夜を明しに
柏原所有れハ島人ゟ食事を給ひ其外ニも船中へ飯米迄
し被遣一艘被下ゟし島人に焼き貰ひ食せしに役所ゟ島役人
船へ来り其日諸道具改め相済より九人の者共役人の家
へ連行定之船を寄せ船中之物共も取集し船ハ江戸
堀江町二丁目宗兵衛八船ニて船頭ニ富蔵と申船頭水主
共に十七人乗之船ニ難風ニ逢ひ洋中へ吹出され候ハ不知
島七ヶ所又船共あまた見えて又所の島を見届け此節ハ船も住
ひ切りに逢へ水船被成んとする処へ船を寄せしハ享保四亥年十
一月難風ニ吹流されし是ハ出羽酒田湊ゟ出船の船頭
左兵衛船頭共ニ八水主共便船の者十二人乗る年此正月の比

彼の島へ漂流せし者今住居島まて五穀の実を食せされハ
鬼島と唱へし月日数送りし内十二人の内九人ハ島にて死失
残る者ハ求三平三郎仁三郎の三人生残りて是より段々
子乗来りし事を始終述ける所島役人の咄ハ此居所に
乗りしといふ三人のものハ若狭小浜宗門なと改め承り候へハ
紛れ無之由ニ而漂流の者しきハ何れも役と云不審の儀を承り
有形に右大帆の船破ニ而漂流せしは四国の者新船を作りしとて
之を漂流と有判と出しけれハ不審を晴し速に書付を下され
掛文書ニ添ひ人の内に添文此者の何とてか船を出させ
なりされとも大嶋へハ帰国にはならぬとて宗せ誂し三宅島ニ
女の流人乗りしといへり船も有れハ帰帆の事を願ひ申さく

先此島に何る五ヶ村に分れ居ると聞えしと
其村々へ分かれ居るなり
一 八丈まて乗来りし節ハ船日数三日程かり古船にて
に乗人島よりは破損の船の綱を三所より
けしてみる程に廻きハとてもかくも海上にても流れ入れ
なり諸ひ有しせしか人にて八丈島へ上陸せしか何れも村々へ
て有る破損の船は諸神仏の擁護にて廿人の
命を取とめたりと誂ひ誠に勝事なりしと
一 八丈島にハ米ハ大略少なきまゝ平生食ハ麦飯
又ハ芋に塩を加へ其芋を小の味ひ
なりしと誠にて乏しの草の根と葉とを添ふ草の根と葉を漬煮

就中塩辛まて甚て良に味ひとも彼のものなり
一 此島味噌なし 豆ハなし 耕せる豆類とかして 菜の
子とし 酒も少充 お茶なとのハ 稀なり 塩辛ま加ふる
安用也 其塩辛を用也 島中国地の風俗ま等し
一 八丈島東西南北とも 七里程也 田畠も何にて 男女共ま
耕地を作る也 此島より 江戸の 内海まて 凡百里余
らんといふ
一 島の風俗 実ま素朴にして 慎ましきの心なし 隣家ハ日中
たりとも 互まてきいて訪ねのハ稀也 睦敷事なり
一 金銀銭の通用あるなし 万此物代物ともに交易をなる風ハ（かハりて）
一 島の風俗 移し かハさそうろ 貌見えて 出羽もまし 葉と

する所を 蚕地飼ふて 絹紬を織る 子供とも又ハ 紬の
被なしの服を着る 男とも山へ入り 薪を伐 田畠を耕し 魚
漁をとりて 業とす
一 鰹なし 山桃此所にて 鰹となして 呑ふ 蛇ものし 蚫
無人島も蚫なし 米の子も昔生ぜり 蛇となる文 塩辛
食事とし
まく 菱良を葉物と称く 食ふ 其葉物振也 瓜作あり
又山桃を塩漬にして 菓子なし 国中にとゆふ
一 米粟麦の三色を 酒に造り 呑ふまて 出来次第呑
申す風俗のよし
一 公儀 御用の品織を立て 村々に織させし さらり 昨今の是
地織らんとの島中子 四五歩にてハなし と 記ま東も宜ともの、

妻女にて其織る所へ通ひ連れ立て陸に渡海なしく
織立るといふ
一 外より何れも渡り来る島の風儀一通りなる事に
まかせ哀みもせす 去年なくてハ時々の家業の様なりとし
又流罪をし物を給ひ此の岩その家に居て干しもとも
紛失なとといふ事なき所なりとそ
一 流人の内ニ此地の風俗を知る者より是迄の通り物様さとのハ
妻を迎へ家様とも稼き 又学文算筆を座業とのハ島の子供
にも教へ 流人へ渡し島役所へ出る事とも 国地より
是迄の通りの様ニ学筆なかの業を手習さする者ハ人
に雇れ あるひハ日を過させ 食を営ひ渡世をつかさとる
事とそ
一 當島流人の内十七人 無人島より帰りし 三人ハ者島中
十七日居りし内 かつ々三種を賄ひ流れ されとも其者とのハ
帰ひなくて在所へ耕作なとする者あれ 或ハ漁者 桟を着 一俵
扶持ひ渡すへし
一 八丈島五ヶ村といふハ
大賀郷村 三根村 樫立村 中之郷 末吉村
右五ヶ村ニて御年貢五百三十両上納ニ相成り島の一番
とありり
一 寺二ヶ寺有り 宗福寺 長楽寺
一 大山二ヶ所有り 西山 富士と称す 東山

一 島役人左之通なり
　地役人 菊池左門　　菊池左源太　　御船預 服部源兵衛
　名主 式部　　兵十郎　　市十郎　　治平　　久平
　年寄 小源太　　金兵衛　　甚之助　　勘十郎　　左治兵衛
　七郎左衛門　　政右衛門　　彦五衛
　神主 奥山河内守

一 小島ハ海上一里余も有之、此島ニヶ村也
　宇津木村　　鳥打村

一 小島名主二人、年寄三人、右之通
　名主 藤蔵　　小左衛門
　年寄 長左衛門　　市左衛門　　五郎七

一 御用船の島え着おゝせ付られハ、此島え罷越候事ニ而三人

並ニ富蔵の船八丈島ハ當年ハ五月廿日の頃より宇津木島え漂着せし、口と候へハ此船ハ青月十九日廿日の内の事なりとんり

富蔵船の水主十七人、合せて廿人の其内一人ハ此船村に
とゝまり島役人に来之外（割注：四人死ニ残り）四人死残り舞卯
へ参りし、お米の頒ち（？）ニ積ニ流人物を此船候積り（？）
並船まで奴ひ居しハ寛まで賀来くなり

一 流人御見分之内一人ハ死し、廿八人と積戻しに入船ニ播州の
御船の積り、中船七人島より御渡しに三人富蔵船の
乗の十七人を乗組一と此船並に島役人より御渡しに越す
出来る御船ハ五百石積にて、此船ハ服部源兵衛ニ
船日十人、島役人菊地織部並ニ伝一人、名主兵十郎、大七十人
乗組し御用船に立出帆（割注：出帆ハ去る五月廿日、但し調を済まし…）
島地見え兼風にて出帆…

丑寅へ向ひ船を乗行に新島神津島利島の辺ニ至り大
島を見失ひ候へハ風烈敷吹出し子島の方へ流され候を
来り海中ニて食事を致し四日和宜しく空しく
吹へ向ひ帆を揚け同廿五日浦賀湊へ船乗入候
一浦賀湊ニて御用船ニ乗せ御番所ニ与力同心中共
逃出ニ付御免の流人御改の上御番所の前ニ於て
人数を改候処三人の者御取調の上右廿一年ニ於て享保四
亥年四月廿六日下田御番所より御届ケ流罪文八郎
子共同人島役人ニ差出し口書 是ハ御用船ニ乗せ御納ニより出候て
御吟味ニ付廿一年以前の御定文ニ基き右御仕置ニ被仰付候へ一通り
事を御番所ニ而申渡しられ候 此段同所の御番所手代共より被仰渡申候人へ右三郎ニ申渡候

巻ニ在る四月廿三日と
見へ候ハ五月廿三日の書違ニ而
候ハ其後相改め候処の書
へ候処ニ三月廿日ニて御
島を出帆せし八月廿日之
事より四日夜半ニ乗出船ニ候八
此へ着て之ハ卯年五月十三日
ハ四月小の月なれハ四日之誤ニ
候是も三十日ニ而有之候ハお
候出帆し五月廿日ニ候
へ此四月と此度ハ空
く写し間違有之

右之趣
一両通

まよい甚八事三郎仁三郎の三人ハ紅葉ヲ以
依之ねさまてとめ置きて口書を以て船宿を以て御届
有り相届候されハ御番所より三人のもの同所御番所
よりされハ宿預り被仰付候て右下田御役所文ニ御
座候所より御吟味ニ付よ候て宿預されの
四月廿三日八丈島役人菊池瀬新五郎
兵十郎同所ニて甚八事三郎仁三郎の三人御預置候様
伊豆七島の支配
之者ニ御代官様御役所ニ候へハ島之者出し口書ニ候ハ
の口書の者共ニ候へハ宿ニて島人之者江戸表ニ罷出候様
流せし船中用之儀ニ付金二両と銭三百文宛御渡ニ候
三人のもの口書ハ直ニ三郎相渡候の口書を取候之ハ御座候

出しまうぬとゆうぬ

一 壱人亀島ゟ押し 新井溪笛山五兵衛船に乗し 船を
甚八 水夫平三郎 仁三郎 兵三郎 堀江所 六右衛門 宮本居
八人船の船も富家総右 武兵衛 水夫唐左衛門 六人の名ゟ
上陸庭へ召出されける此所ゟ甚八など二人の者ゟ人も取く
其車し 刺刀一挺 砲 下 米箇 下 肉子斗 一斗 甘井ハ服見も袋ちゟ船の沿見沙汰にて
焼米し 鍋と平 出遣ってに 大組以て船 針を折 出候し人宿を拵し 打子し を以て又亀島ゟそ 仮に取 しゟ
指来り 何事 此所し 兵三郎 様へ 出きしゟ
よく上りしとう見へてまずれ薫を召して帰唐 権兵衛 亀島
申年月庭し 事ゟも 一つ 所毎何し入れハ見し 御本陣庭
もなく 以前ゟ見へたり

豊江只甚八平三郎仁三郎 共新居を船やりける 江の船ゟハ 新井伊兵衛守 信濃船ゟ戻りし享保四年 子年江國漂流の様々朝を られ其後新井筑後守訓読 記されり

一 從 公儀甚八 平三郎 仁三郎 三人へ 米を被下 たれぬ
又 松平左近将監様より唐の亀島の始末 御尋ねありけれは御
料理下され金子百匹つゝ 被下 其外所々より亀島の者共
下されたり
帰り松平安芸守様より 草物 帷子 肴 御馬 絵本も御
屋くせんと致 料理下され三人の者共ゟ取の内 三人へ 持ち持たせ 肴
道中も只ニ帰中毎へ 附添者共に着まで帰国させ

右者江國新井溪笛山五兵衛船ゟ乗込 御船
水夫ども九人 便船一人 都合十二人の者共 享保四年 亥の十
月上総國九十九里浜の沖にて 悪風に逢ひ 船は 志洋

其渡の者以御沙汰無之陸へ上りて本船帰國

とも其身の何とも見定めたる事ども打解かれハ猶更へ船

く此島に居り魚鳥を取りて日を送りけり然るに後に嘆き

年月を過ごし内にも乏しき事をも船にて人に逢ふ死ぬるを

施さ甚しく水主平三郎仁右衛門の三人生残りて本國

還る事廿一年目の元文四年己未の三月十九日より

日江戸堀江町宮本善八か船に乗り船頭富蔵

水主とも十七人難風に吹流され水國にいたり

漂流ぬる此島へ船流来る水主八平三郎仁右衛門の三人

の外は皆餓死して富蔵か船の水主以上三人

此者を本國へ送れハ其事の子細を語り帰る事に遇

子孫を見ることを得ましく思ひしに其船の帰國ハ本島

へ漂ひ着て淋しき年月十七日帰國の地へ渡りし船の

流浪の事あられハ其船に乗りて再び江戸の海に帰

る事ありし陸の国中上陸の後此上漂流の人を見るを嘆き

年月の艱難ハなかりし漂流の人に何とも思ふ事なれ

し船乗を救ひし陸の封を松平豊後守殿御預ケ十一書置

乃御下地十二年此後寛延三年午七月上旬写置也

記をし本書のことく記し其文字にも誤りあらんか

事を正すとも我か意ハ写す事の御心得を附て乃ち遠く

か候漂流記其余も多くありて写す事をなさすこれを

写す記し此後に写す所ハ後の記しを用ひ写す事あり

しか書を出版して文化の潤つかまつる所を奇特と存
へて乞てこれを継ひ後の助ともの一助ともなりなんかし
老人魚澄廣記聞と題し　文政五年　正月　中旬　深愚老
御書玉斎しるす